

せきぜんいせき
積善遺跡 (No.440)

十二所二ツ橋4番3

例 言

1. 本報は「積善遺跡（鎌倉市 No.440）」内の一部、十二所二ツ橋 4 番 3 地点（略称 J S）における個人専用住宅の建築にともなう埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 調査期間：平成 16 年（2004）4 月 23 日～同年 5 月 20 日 調査面積：34 m²
現地調査・整理作業の体制は以下の通りである。
調査担当者：原 廣志
調査員：須佐直子・本城 裕・岩崎卓治・須佐仁和・早坂伸市・吉田桂子・小野夏菜
調査補助員：橋本和之・原考史・銘苺春也・平山千絵
協力機関名：鎌倉考古学研究所
4. 本報の執筆は、第 1～3 章を原があたり第 4 章については調査員が協議して原が稿を草した。
本報の挿図・写真図版の作成には、須佐（直）・岩崎卓治・小野夏菜・吉田桂子が行った。
本報の掲載写真は、遺構の全景・個別を原があたり、出土遺物を須佐（仁）が撮影した。
発掘調査における出土遺物、図面・写真などは鎌倉市教育委員会が保管している。
5. 本報の凡例は、以下の通りである。
 - ・挿図縮尺 全側図：1/80 遺構図 1/50 遺物図 1/3
 - ・遺物図 — — — は釉薬の釉際を示し、黒塗りは主にかわらけの墨書痕や灯明皿付着の油煤煙、漆器の朱描き文様を表現している。さらに遺物観察表において手づくねかわらけ外底径の計測値は外底指頭痕と口縁部下位との稜部の数値を表わした。
 - ・使用名称 本文中に使用した用語のうち、「土丹」は鎌倉の丘陵基盤で三浦・葉山岩層群の泥岩、「鎌倉石」は池子岩層に顕著な凝灰岩質砂岩、「伊豆石」は、相模川以西の河川・海浜に産する礎石に利用可能な水摩した扁平円礫のことを指す。
 - ・遺物観察表 単位 cm、（ ）は推定数値を示している。
6. 本遺跡の現地調査及び資料整理に際して多くの方々からご助言とご協力を戴いた。記して感謝の意を表したい（敬称略、五十音順）。
伊丹まどか・菊川 泉・菊川英政・古田戸俊一・汐見一夫・宗臺秀明・宗臺富貴子・玉林美男・中野晴久・松尾宣方・馬淵和雄・八重樫忠郎

目 次

本 文 目 次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境	5
1. 遺跡の位置と地形	
2. 遺跡の歴史的環境	
第2章 調査の概要	8
1. 調査の経過	
2. 側量軸の設定	
3. 層序と生活面	
第3章 検出遺構と出土遺物	10
1. 第1面の遺構と遺物	
2. 第2面の遺構と遺物	
第4章 まとめ	21

挿 図 目 次

図1 遺跡と調査地点の位置	6	図8 第1面出土遺物	15
図2 国土座標位置・グリッド配置図	9	図9 第1面下土坑12・13	17
図3 調査区西壁土層堆積図	10	図10 第2面全測図	18
図4 第1面全測図	11	図11 第2面遺構	19
図5 第1面建物1	12	図12 第1面下・第2面出土遺物	20
図6 第1面建物1出土遺物	13	図13 第2面出土遺物	21
図7 第1面遺構	14		

表 目 次

表1 周辺の調査地点と遺跡	7	表5 遺物観察表(4)	26
表2 遺物観察表(1)	23	表6 遺物分類別出土数量・比率表	27
表3 遺物観察表(2)	24		
表4 遺物観察表(3)	25		

図 版 目 次

図版 1	a. 第1面全景(北から) b. 建物1(西から) c. 建物1ロ-3(西から) d. 建物1ロ-2(北から) ……………	28
図版 2	a. 建物1イ-4(東から) b. 建物1ハ-3(西から) c. 土坑6(西から) d. 土坑10白磁皿出土状況 e. 第1面下土坑13 ……………	29
図版 3	a. 第2面全景(北から) b. 第2面全景(南から) c. P10・溝1東端(南から) d. 土坑13、P12・13(西から) ……………	30
図版 4	a. 溝1(西から) b. 溝1(東から) c. P14(東から) d. 調査区西壁土層 e. 調査区西壁南側土層 f. 調査区西壁北側土層 ……………	31
図版 5	a. 建物1イ-1~4 b. 建物1ロ-1~4 c. 建物1ハ-3 d. 土坑2 e. 土坑3 ……………	32
図版 6	a. 土坑4 b. 土坑5 c. 土坑6 d. 土坑8 e. 土坑9 f. 土坑10 g. 土坑11 h. P5 i. P6 j. P7 ……………	33
図版 7	a. 第1面遺構外 b. 土坑12 c. 土坑13 d. 土坑16 e. 溝1 ……………	34
図版 8	a. 溝1 b. P10 c. P11 d. P13 e. P14 f. 第2面遺構外 ……………	35

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置と地形

本調査地点は市街地北東部である十二所地区、滑川上中流域の左岸に位置し、JR 鎌倉駅からほぼ真東方へ約2kmの距離にあたる鎌倉市十二所二ツ橋4番3に所在する。鎌倉の市街地と呼称される地域は、100m前後の馬蹄形の丘陵に囲まれ、相模湾へと注ぐ滑川を中心とした扇状地に低湿地と砂丘がひろがった地形を形成している。滑川は鎌倉の北東最奥にある朝比奈切通付近を水源に発した太刀洗川に始まり、南西方向へ蛇行しながら谷戸の間を進んで南北の低い丘陵の谷間を西に流れていく。県道金沢・鎌倉線（近世の金沢往還路・中世の六浦道）と何度か交差して二階堂川や西御門川などと合流を繰り返しながら市街地の沖積低地に至り、由比ヶ浜に達する。十二所周辺は、丘陵頂部を挟んだ東側と北側は横浜市の金沢区と栄区、南側が逗子市の池子や沼間などに隣接しており、西側は積善の谷戸にあたりその奥は鎌倉・逗子ハイランドの住宅地が広がっている。遺跡が所在する積善ほかに光触寺橋付近から西をみると、明石谷・二ツ橋・泉水・御所之内など字名を残した谷戸が滑川沿いに樹枝状に開析している。

調査地点前の六浦道は、鎌倉から朝比奈切通を抜けて六浦・金沢を結び、さらに東京湾を隔てて上総国へと通ずるルートで鎌倉開府以前より存在したとみられ、当時の主要交通路であった。昭和31年、県道金沢・鎌倉線として新しい道路が開通しても一年を通して人の絶えない重要な往還路となっている。

2. 遺跡の歴史的環境

鎌倉市街地は古代相模国鎌倉郡の中心域に属し、JR 鎌倉駅西方で市立御成小学校地点（今小路西遺跡）の発掘調査では奈良～平安時代にかけての鎌倉郡の郡衙跡が発見された。古代の鎌倉郡は鎌倉郷・荏草郷・梶原郷など七郷から成っており、この周辺は荏草郷の東端に位置したと考えられる。六浦道は朝比奈切通付近から相模国と武蔵国の境界になり、武蔵国六浦へと通じる道で相模・武蔵と房総方面とが江戸湾（東京湾）を隔てて海上経由で結ばれる重要なルートであったと想定される。六浦道沿いには、長治元(1104)創建という荏柄天神社、行基開創の伝説が残る杉本寺（大倉観音堂）などの鎌倉開府以前から所在した寺社と考えられ、この道の重要性を裏付けていよう。頼朝は入府するとすぐ御所をおいた大倉の地もやはりこの道沿いにあたり、御家人達も周辺に居を構えていたようである。六浦道沿いの本遺跡周辺には御所之内の古地名がある足利公方屋敷跡をはじめ、明王院の西の谷に梶原景時邸や明石谷の大江広元邸などの御家人クラスの屋敷跡という伝承地があり、朝比奈切通の近くには上総介広常も居を構えていたといわれる。その真為は定かではないとしても、この十二所周辺に有力御家人が居館を構えていたことは確かであろう。また本調査地点の滑川を挟んだ字名二ツ橋の地域、阿弥陀山を背負った場所は第四代将軍頼経の明王院五大堂があり、その東側一帯は建暦二年(1212)に第三代将軍の源実朝が「君恩父徳」に報謝するため大倉新御堂（『吾妻鏡』）ともいう大慈寺の跡と推定されている。調査地の北東側、宇佐小路の南の谷には岩殿山光触寺があり、明石谷一帯は明王院の坊舎になる一心院の旧跡と伝えられている。本遺跡は古代～中世を通じて重要路であった六浦道東端に位置し、鎌倉の外港六浦津から陸路での入口として経済的な場であると、同時に寺院が建立されていた宗教的な空間としての側面も持っていたことになる。調査地点前を走る県道金沢・鎌倉線は中世では六浦道と呼ばれ、鎌倉から朝比奈切通しを越えて鎌倉の外港である武蔵国六浦への重要な往還路であった。六浦津を通して江戸湾（東京湾）から房総半島を臨み、江戸湾の海上交通路の基点であるとともに東日本の沿岸海上交通路の要衝に位置するとものであった。いずれにせよ今後の調査により周辺地域の様相の解明が期待される。



△ 遺跡の位置 [S=1/50,000]



△ 調査地点の位置 [S=1/5,000]

図1 遺跡と調査地点の位置

表1 周辺の調査地点と遺跡

()は県遺跡台帳番号

No	遺跡名	調査地点	遺跡の特徴・文献など
1	積善遺跡 (No.440)	十二所二ツ橋 4番3	本調査地
2	積善遺跡 (No.440)	十二所積善 952番6	遺構面3面、竪穴状建物・土坑・かわらけ溜り・ピットなど 13C 後葉～14C前半 秋山・須佐・原 1998
3	積善遺跡 (No.440)	十二所積善 952番8	遺構面4面、掘立柱建物・土坑・井戸・柱穴列・ピット・かわら け溜りなど 13C後葉～14C前半 秋山・須佐・原 1999
4	公方屋敷跡 (No.268)	浄明寺三丁目 143番2	遺構面3面、掘立柱建物・土坑・井戸・道路・側溝・かわらけ溜 りなど 13C前葉～15C世紀前葉 原・橋場 1994
5	公方屋敷跡 (No.268)	浄明寺三丁目 151番1	遺構面3面、掘立柱建物・土坑・ピットなどを検出 13世紀中葉 ～15世紀前半 宮田ほか1996
6	御所内横穴 (No.162)	浄明寺四丁目 273番1	やぐら・土坑・溝・近世横穴など 14世紀代・19世紀 原・田 代 1990b、継 1991b(公方屋敷内やぐら)
7	東泉水やぐら群	浄明寺五丁目 311番	やぐら 本遺跡調査中に踏査
8	明石谷東やぐら群 (No.458)	十二所 824番	やぐら 14世紀～15世紀 松葉・鈴木 2010
9	明石谷やぐら群 (No.93)	十二所 888番	井戸・崖裾の造成遺構など 14世紀～15世紀・近世 鈴木・村 上・根本 2003
10	明王院門前遺跡	十二所明石谷 922番	やぐら 14世紀後半～15世紀 田代・宗臺 1998

【引用・参考文献】

- 秋山哲雄・原 廣志 1998「積善遺跡 十二所積善 952番6地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14(第2分冊)
鎌倉市教育委員会
- 秋山哲雄・原 廣志 1999「積善遺跡 十二所積善 952番8地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』15(第1分冊) 鎌
倉市教育委員会
- 鈴木庸一郎・村上吉正・根本志保 2003『明石谷やぐら群・明石谷東やぐら群』かながわ考古学財団調査報告書 154
- 継 実 1991b「公方屋敷内やぐら 鎌倉市浄明寺四丁目 272番1」『平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘
調査報告書』公方屋敷内やぐら発掘調査団
- 田代郁夫・宗臺秀明 1998「明王院門前遺跡」『中世石窟遺構の調査Ⅱ』東国歴史考古学研究所報告第15集
- 原 廣志・橋場君男 1994「公方屋敷跡 浄明寺三丁目 143番2地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』10(第1分
冊)鎌倉市教育委員会
- 原 廣志・田代郁夫 1990b「公方屋敷内やぐら 鎌倉市浄明寺四丁目 272番1」『昭和63年度鎌倉市内急傾斜地崩落対策
事業に伴う発掘調査報告書』公方屋敷内やぐら発掘調査団
- 松葉 崇・鈴木絵美 2010『明石谷東やぐらⅡ』かながわ考古学財団調査報告書 256
- 馬淵和雄 1994「武士の都鎌倉-その成立と構想をめぐって-」網野善彦・石井 進編『中世の風景を読む-2』新人物往
来社
- 三浦勝男 2001「鎌倉の地名考(二六) 一十二所一」『鎌倉』92 鎌倉文化研究会
- 宮田 真・森 孝子・高野昌巳・滝澤晶子 1996『公方屋敷跡発掘調査報告書』公方屋敷跡発掘調査団

第2章 調査の概要

1. 調査の経過

本調査地点は個人専用住宅の建設に先立ち、建設計画が鋼管杭の設置による基礎工事を内容とするものであったため、埋蔵文化財に影響を及ぼすと判断されたので鎌倉市教育委員会による遺構確認の試掘調査が行われた。その結果、現地下約30cmまで現代客土が確認され、その直下は中世遺物包含層をほとんど含まず二時期の遺構面（生活面）の存在が確認され、それに伴う遺構・遺物が明らかになり発掘調査を実施する運びとなった。現地調査は平成16年4月23日に機材搬入、重機により試掘データに基づいて地表下20cm程までの表土層を除去した後、以下を人力により掘り下げて遺構検出をおこなった。調査面積は34.0㎡を対象である。調査の結果、礎石建物、土坑、溝、ピットなどにより構成された遺構群が検出され、それに伴い13世紀後葉～14世紀前半にかけてのかわらけ・陶磁器類・金属製品などと2時期の生活面が検出された。同年5月20日までの間に必要な記録作業をおこない、同日に機材撤収して現地調査を終了した。調査の経過については、以下に主な作業内容を日誌抜粋で記しておく。

【日誌抄】

- 4月23日（金） 調査区を設定して重機により地表下20cmまで表土掘削。機材搬入とテント設営。
- 26日（月） 第1面の検出及び遺構確認作業。鎌倉市4級基準点を基として測量用方眼の設定。
- 5月7日（金） 第1面全景・個別遺構の写真撮影。第1面の平面図作成を開始。
- 17日（月） 第2面全景・個別遺構の写真撮影。第2面の平面図作成を開始。
- 19日（水） 調査区西壁土層堆積の写真撮影及び土層断面図を作成。
- 20日（木） 現地調査終了。機材撤収。

2. 側量軸の設定

調査にあたって使用した側量軸の設定には、図2に示したように国土座標の数値を用いており、側量方眼軸は調査区の軸方向にほぼ平行して基準の南北軸を設けた。側量軸の設定には調査地東側を南北に走る道路面上に鎌倉市道路管理課が設定した市4級基準点（第IV座標系）のC002と、C003との関係から開放トラバース側量により算出して側量基準点にあたるA-3杭とF-3杭をそれぞれ設置した。さらに側量軸は2m方眼による軸線を配し、東西軸線には西から算用数字1～5、南北軸線には北からアルファベットA～Fをそれぞれ付してグリット設定を行った。

図2に示した座標値は現地調査時で使用した日本測地系（座標AREA9）の国土座標値であり方位標の北は真北を示しているが、市4級基準点002・003と、側量方眼軸のA-3・F-3グリット杭については、整理作業の段階で国土地理院が公開する座標変換ソフト『web版TKY2JGD』によって世界測地系第IX系の座標数値に準じて算出した数値を図中に記した。なお、調査区は世界測地系でX-75.545～75.560、Y-23.395～23.405の区域内に位置している。また海拔標高値の原点は、鎌倉ハイランド入口に近い鎌倉市1級水準点：BM. 34＝海拔標高23.3873mを基に調査地点の方眼軸A-3・F-3杭（L=19.764m・19.638m）へ仮水準点を移設した。方眼南北軸方位はN-26°46'40"-Eである。

3. 層序

調査地点における現地表の海拔標高は 19.50m 前後ではほぼ平坦な土地となっており、調査区内の堆積土層は概ね 5 層に区分され 2 時期の遺構面が検出された (図 3)。調査で確認した土層は厚さ 20~30cm ほどの現代客土層の表土を除去すると、中世遺物包含層を挟まずに鎌倉石の破砕粒を敷き詰めた生活面と、それに伴う礎石建物跡・土坑・ピットなどが認められ、第 1 面として調査を行った。この面は海拔標高約 19.20m を計る。第 2 面は薄い間層 (2・3 層) を挟んで中世地山に類似した灰褐色粘質土の上面で土坑・溝・ピットなど検出しており、海拔標高 19.00m 程である。その下は中世基盤層にあたる締りの強い茶~灰褐色粘質土が検出されている。

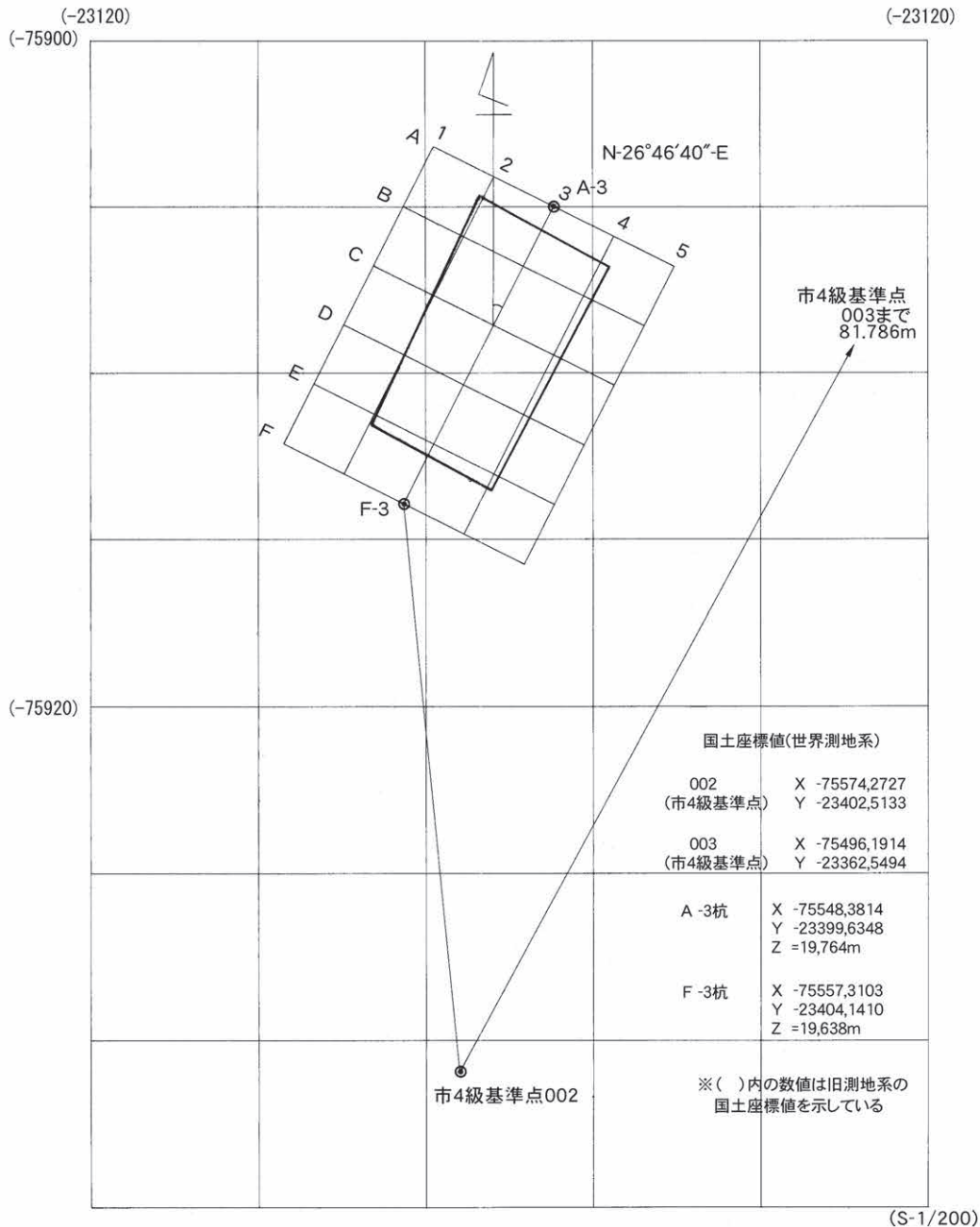


図2 国土座標位置・グリッド配置図

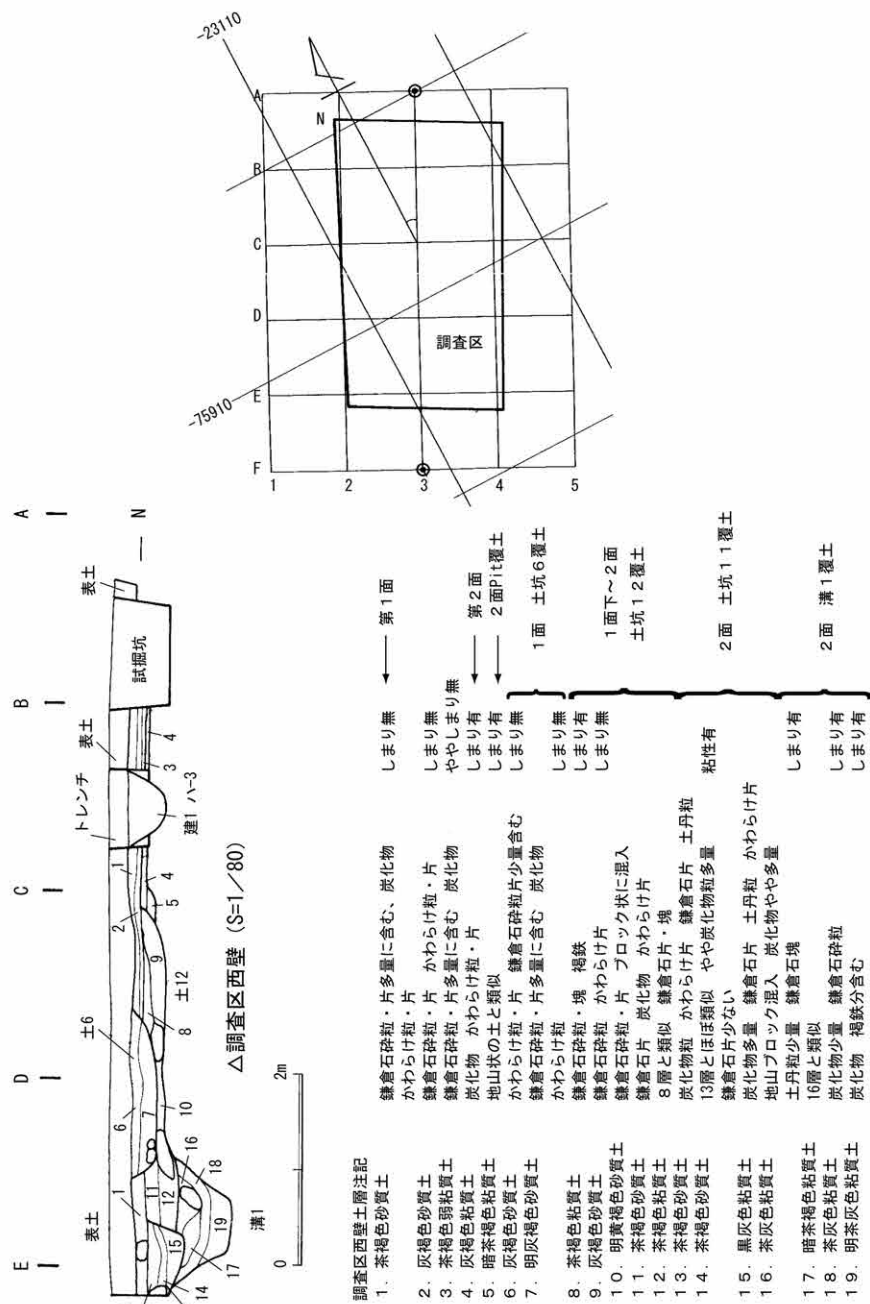


図3 調査区西壁土層堆積図

第3章 検出遺構と出土遺物

1. 第1面の遺構と遺物

第1面に伴って検出された遺構には、礎石建物1軒・土坑10基・ピット約20口などが認められた。出土遺物にはかわらけをはじめ、青磁・青白磁の貿易陶磁器、瀬戸・常滑窯の国産陶器、伊勢系の土器類、瓦類、石製品、銅銭・鉄釘の金属製品などである。

建物1 (図5・6)

この建物は南北方向の3間：615cm、東西方向の2間：402cmの規模が確認された礎石建物である。

東西柱列は一間分の柱間を確認しただけだったので調査区外への拡がりを把握するために必要最小限のトレンチを設定して礎石掘り方の検出を行った。西サブトレンチでは柱通り2mほどの位置で礎石が抜き取られた掘り方（ハ-3掘り方）を発見したが、東サブトレンチでは近世井戸の攪乱で破壊されており建物の拡がりは把握できていない。

柱間寸法は南北列の芯々距離が各々205cmほどで、東西列の距離をみると東から206・196cmをそれぞれ測る。掘り方は径60～110cm、深さ20～30cmを測り、形状は楕円形を呈する。礎石の石材は粗粒凝灰岩質と粗砂粒砂岩質（所謂鎌倉石よりはともに軟質な石材）を方形板状に加工したものを併用しており、大きさは長さ30～48cm、幅

28～34cm、厚さ20～30cmほどの石材を用いている。この建物の南北軸方位は、N— 27° 30′ —Eである。

本建物跡の各礎石掘り方中から出土した遺物のうち、図化し得たものを図6に示した。遺物の種類別内訳はかわらけ285点、舶載陶磁器1点（白磁皿）、国産陶器6点（瀬戸窯1・常滑窯5）、石製品3点、金属製品5点の計300点（31.5%）で高い出土比率を示している。出土したかわらけは全てロクロ成形の回転糸切底で大皿は薄手丸深タイプと、やや厚手器壁で背高の内彎タイプが主体を占めている。

イ列-1掘り方は1・2のかわらけ大小皿であるが大皿は底部厚く開いた器壁のもの、3が瀬戸窯四耳壺である。イ列-2掘り方は4～8のかわらけ大小皿である。大皿は背高で内彎した器形もの、9～11の鉄釘である。イ列-3からは12・13のかわらけ大皿で背高めで薄手器壁と厚手器壁がある。イ列-4掘り方は14～17のかわらけ大小皿である。ロ列-1掘り方は18～22のかわらけで小皿が口径・提携の比率が少なく低い器高ものと大皿か薄手丸深のタイプ、23が白磁口禿皿の底部片である。ロ列-2掘り方は24がかわらけ小皿で口径・底径の比率が大きめである。ロ列-3掘り方は25～28のかわらけは25・27の小皿が薄手器壁で開き気味の器形と、26の厚手の器壁で内彎したものとがみられ、大皿は背低で開き気味の器壁のである。ロ列-4掘り方は29のかわらけ小皿で薄い器壁は開く立ち上がり。ハ列-3掘り方は30がかわらけ小皿で薄い器壁は開き気味の器形である。31は常滑窯片口鉢I類の口縁片である。

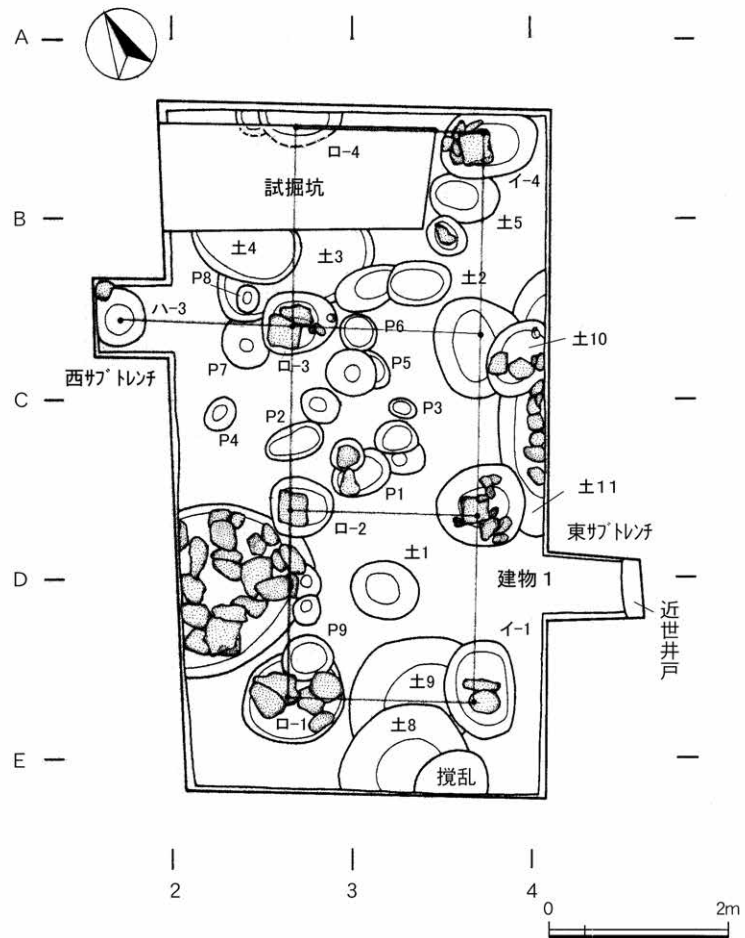
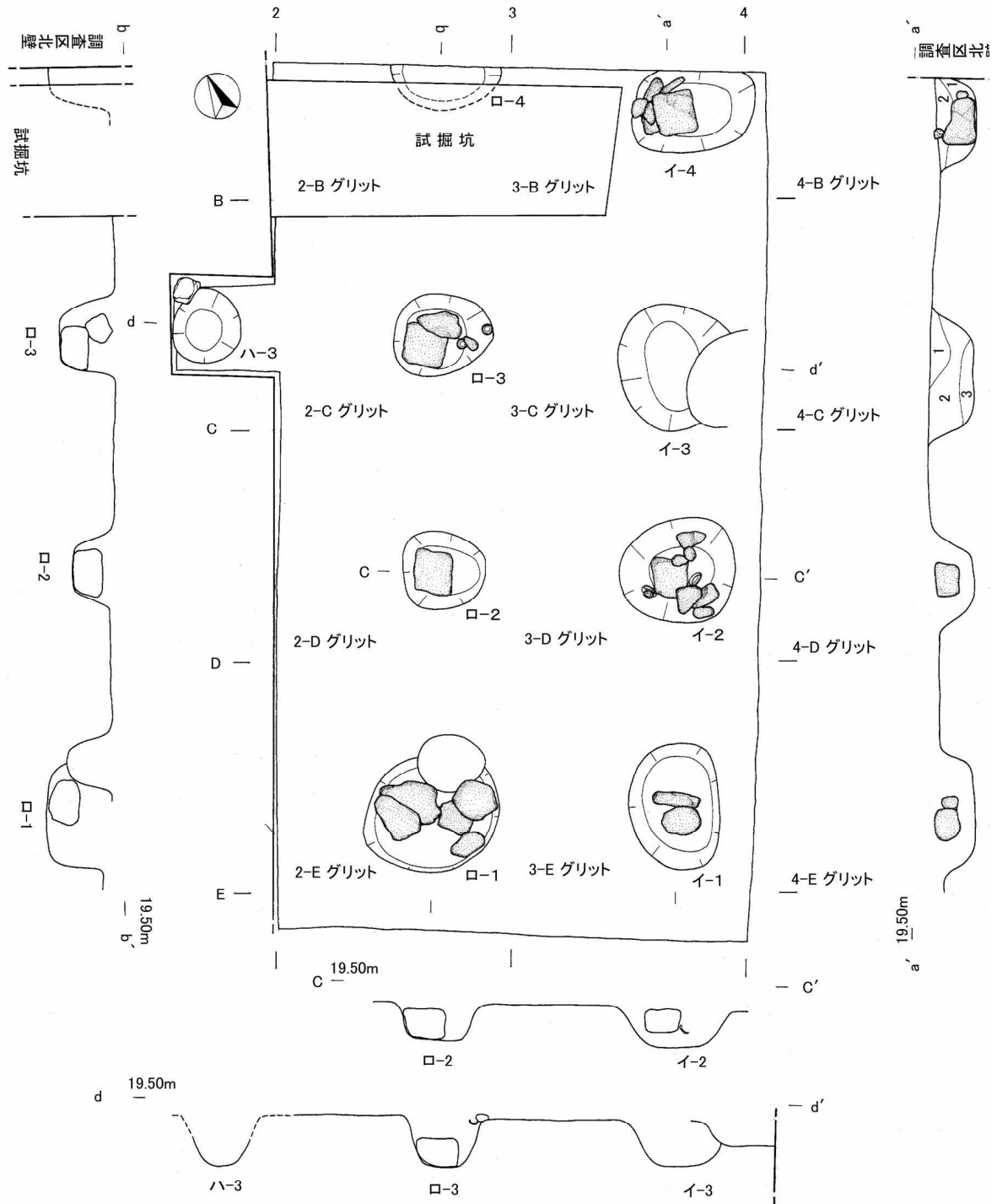


図4 第1面全側図



建物1 イー3土層注記

- | | |
|------------|----------------------|
| 1. 茶褐色弱砂質土 | 明茶褐色粘土ブロック、炭化物を多量に含む |
| 2. 暗褐色砂質土 | 鎌倉石小塊 炭化物をやや多く含む |
| 3. 暗褐色粘質土 | 炭化物 土丹粒少量含む |

建物1 イー4土層注記

- | | | |
|------------|-------------------|--------|
| 1. 暗灰褐色砂質土 | 炭化物 かむらけ片 焼土多量に含む | しまりやや有 |
| 2. 暗褐色粘質土 | 炭化物 鎌倉石砕粒を含む | しまり有 |
| | | しまり無し |
| | | しまり有 |



図5 第1面建物1

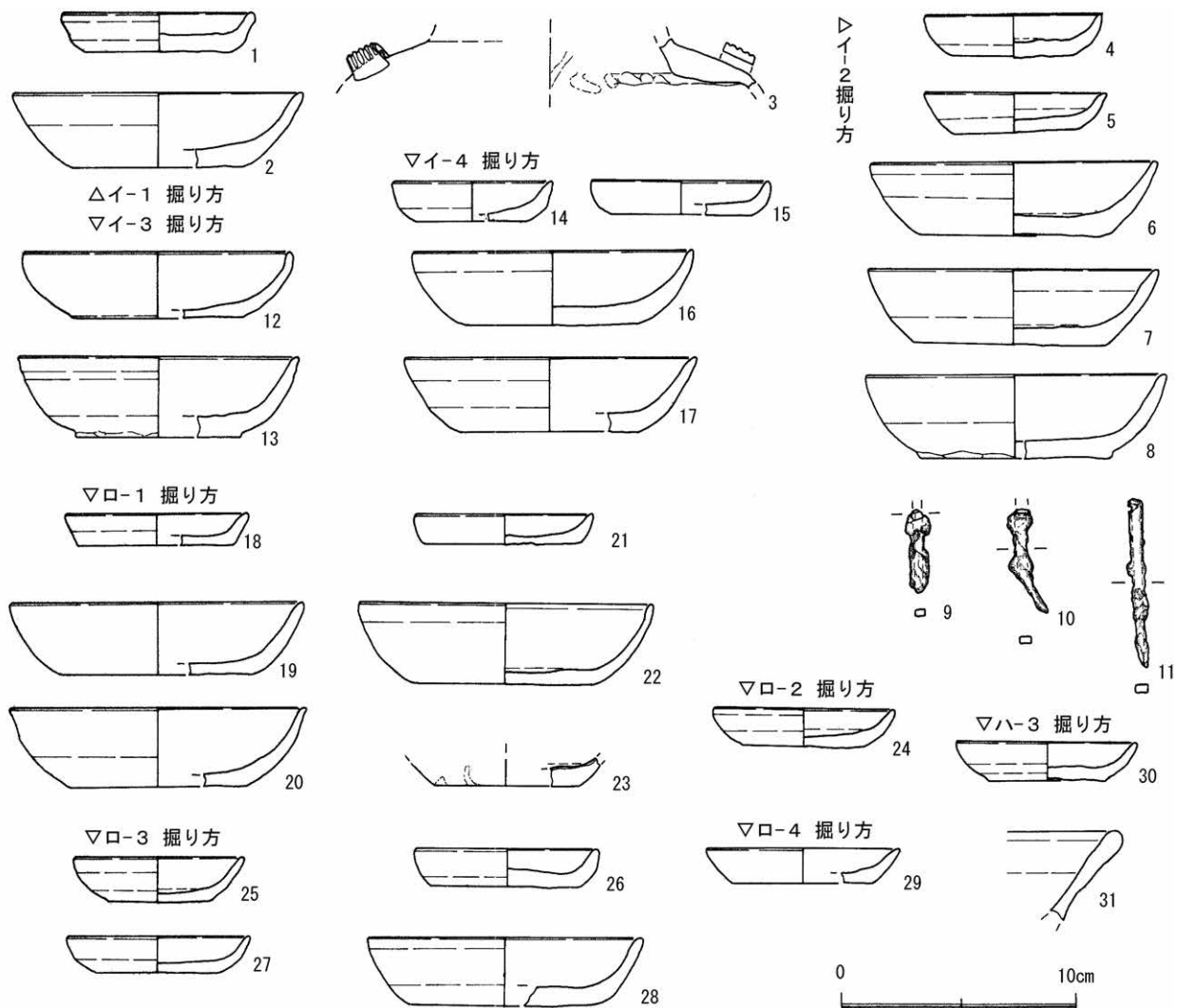


図6 第1面建物1出土遺物

土坑 (図7・8)

土坑1 : D-1 杭の位置で検出された楕円形を呈したところである。大きさは長径 77cm、短径 63cm、深さ 42cm を測り、断面逆台形になる小型の土坑である。覆土は粗砂粒と炭化物を多めに含んだ灰褐色砂質土と下層の灰褐色弱砂質土の2層からなり、遺物は図8-1の鉄釘片が1点出土している。

土坑2 : B-3グリットに位置する。規模は長径 73cm、短径 48cm、深さ 25cm の浅い皿状の楕円形を呈した土坑である。覆土は粗砂粒と炭化物をやや多く含んだ灰褐色弱砂質土である。遺物は図8-2の竜泉窯系の青磁鎬蓮弁文碗の体部小片が1点出土した。

土坑3 : B-3グリットに位置し、建物1ロー3掘り方・土坑4・P8に壊されており、P7よりも新しい大型の土坑である。規模は東西径 185cm、南北径 96cm の大きさと深さ約 15cm と浅い掘り方である。覆土は炭化物をやや多く含んだ締りのない茶灰色弱粘質土である。遺物は図8-3~6のかわらけが口径 7.7~8.0cm の背低器形の皿と、口径 12.8cm の厚手器壁で開き気味の器形を呈した大皿である。7は基石で円形の扁平な自然黒石を用いている。8~12の北宋銭が5枚出土した。8が祥符元宝(初鑄 1008年)、9が皇宋通宝(初鑄 1039年)、10が嘉祐通宝(初鑄 1056年)、11が治平元宝(初鑄 1064年)、12が元豊通宝(初鑄 1078年)である。

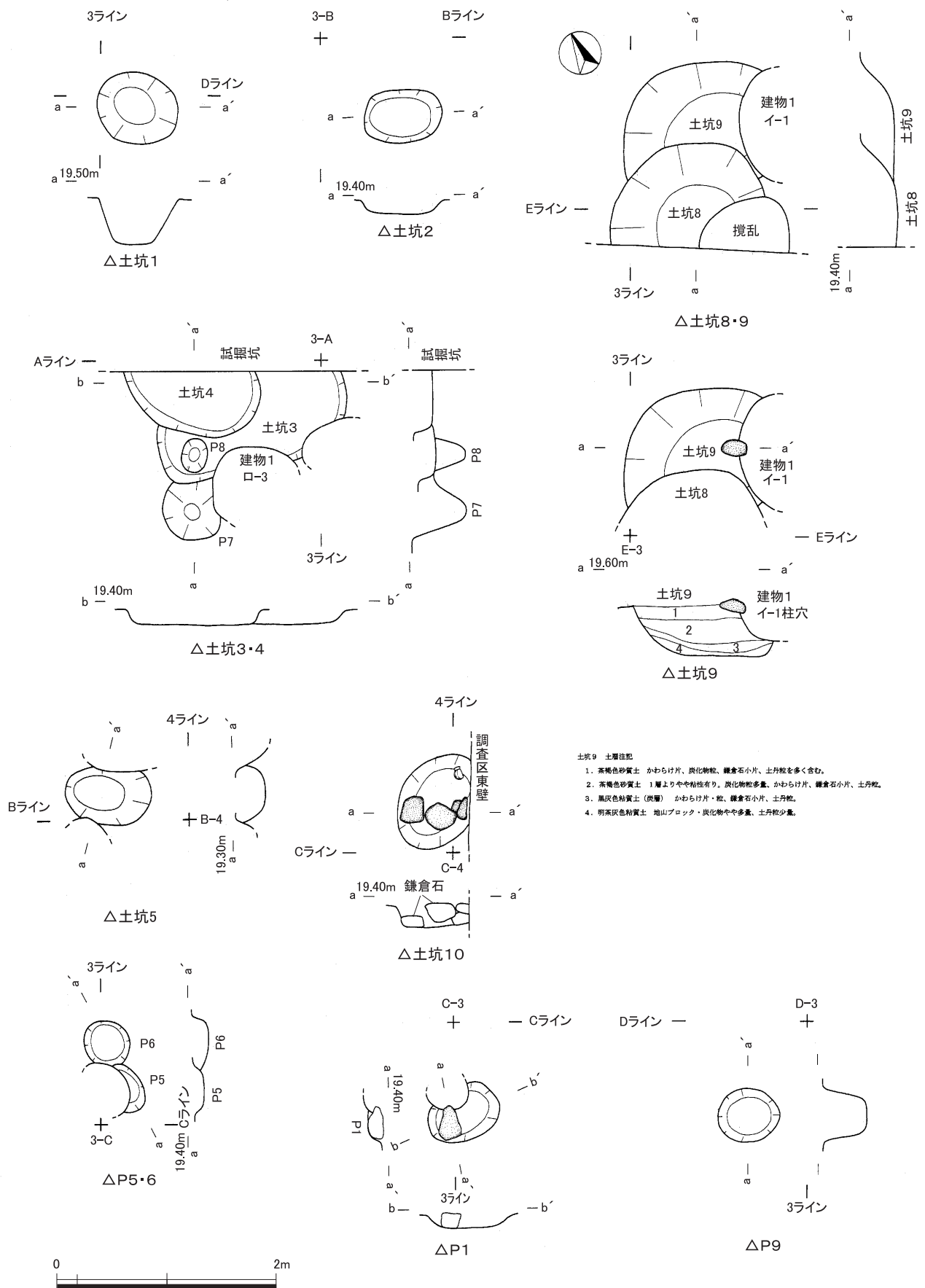


図7 第1面各遺構

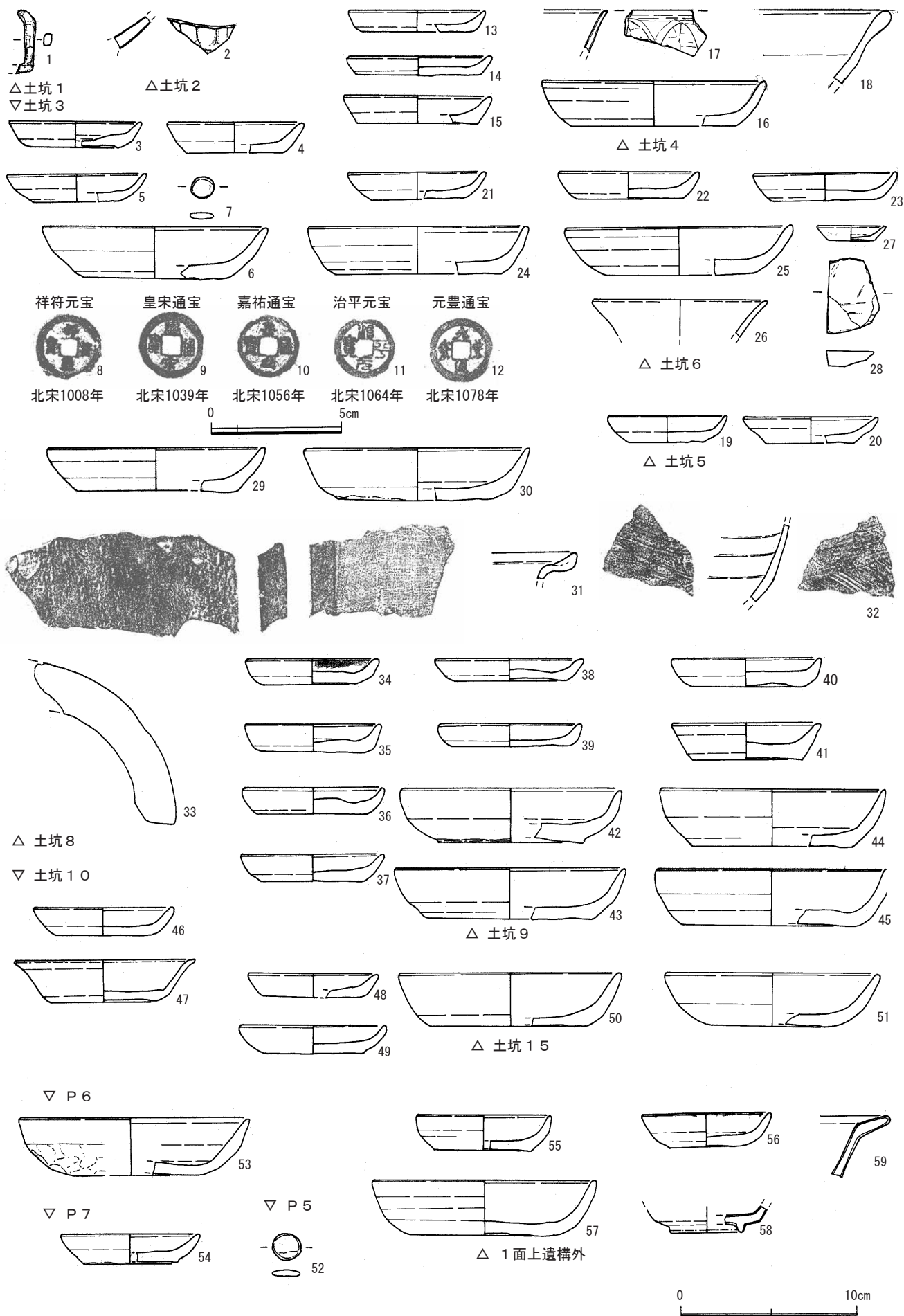


图8 第1面 出土遺物

土坑4：本址は土坑3より新しい遺構である。平面形状は楕円形を呈し、長径130cm、短径78cm前後、深さ17cmを測り、浅い皿状の掘り方である。覆土はかわらけ粒を混入した締りのない茶褐色弱砂質土である。出土遺物は図8-13~16のかわらけで小皿が口径7.9~8.3cmの背低で直線的な開いた立ち上がりの器形、大皿は口径12.8cmで底径の広い背低気味な器形のものである。17は竜泉窯系の青磁鎚蓮弁文碗の口縁部小片、18は常滑窯片口鉢I類の口縁部で内面の使用痕は確認できなかった。

土坑5：調査区北東隅に位置し、建物1イー4掘り方に一部を壊されている。形状は楕円形を呈し、東西径78cm、南北径50cm、深さ28cmを測る。覆土は上位に薄い炭化物層がある灰褐色砂質土である。遺物は図8-19・20のかわらけ小皿とともに底部から外反気味に立ち上がり体部中位に稜をもつもの。

土坑6：C・D-2グリットに位置し、西側は調査区外に拡がっている。建物1ロー2掘り方に一部をこわされていた。平面形状は楕円形と思われ、大きさは東西径175cm以上、南北径182cm、確認面からの深さ30cmで大型の土坑である。覆土は2層からなり上層が灰褐色砂質土でかわらけ片・粗砂を少量含み、下層が明灰褐色砂質土で粗砂を多く混じえた締りのないもの、鎌倉石類の凝灰岩質砂岩塊と大小土丹塊が多く認められた。出土遺物は図8-22~25のかわらけで小皿が口径8cm以上の背低気味の薄手器壁、大皿は背低で口径と底径の比率が小さいものと、大きめなものがある。26は白磁口禿皿で口縁部が外反気味の器形である。27は瀬戸窯入子で口径約4cmの小型品で外底にへら削り痕があり、内底面に紅と思しき赤色物質が付着する。28は緑味灰白色泥岩質で京都鳴滝産の仕上砥である。

土坑8：E-3杭に位置し、南側は調査区外に拡がっている。土坑9よりも新しいが近代ゴミ穴の攪乱で壊されていた。大きさは東西径146cm以上、南北径145cm以上、深さ30cmを測り、楕円形の形状と考えられる。明灰褐色砂質土の覆土中からは図8-29・30のロクロ成形のかわらけ大皿、31・32の伊勢系土鍋で同一個体の資料である。33は男瓦(丸瓦)で凸面縄目叩き後にスリ消し成形、凹面が細かな布目痕であり、永福寺II期瓦(埼玉県美郷の水殿瓦窯産瓦)と類似する。

土坑9：土坑8と建物1のイー1掘り方よりも古い土坑である。確認された規模は東西径160cm以上、南北径約135cm、深さ46cmでかわらけや炭化物を多く交えた大型のゴミ穴土坑と考えられる。覆土は下位に堆積していた炭化物層を挟み大きく分けて2層から構成される。上層は締りの弱い茶褐色砂質土(1・2層)、下層が地山ブツクを含む茶灰色粘質土であり、上層覆土に伴ってかわらけの完形品や破片が多く出土している。出土遺物は図8-34~45がロクロ成形のかわらけ大小皿である。小皿は41の直線的に大きく開く器形で器高が2cmを超えるもの以外、すべて背低(器高1.5cm前後)の器形である。34は口縁部に煤付着した灯明皿であろう。大皿の42~45は背低で口径13cm前後の内彎気味の器形である。

土坑10：C-4杭に隣接した位置で建物1のイー3掘り方を壊すように検出された。平面は楕円形状を呈し、南北径94cm、東西径73cm、深さ25cmの大きさの底面が平らな掘り方である。覆土は締りのない茶褐色砂質土で鎌倉石大小塊と粗砂を多く交えている。遺物は図8-48がロクロ成形のかわらけ小皿、49が白磁口元皿で口縁部が外反気味である。

土坑11：建物1のイー2・3掘り方と土坑10に壊され、東側は調査区外に拡がる大型の土坑である。確認した規模は南北長294cm、東西長50cm、深さ20cmほどの浅いものである。茶褐色砂質土の覆土中から大小の鎌倉石・土丹塊が認められた。出土遺物は図8-48~51のロクロ成形かわらけである。小皿は背低の薄手器壁のもの、大皿は背低の内彎気味の器形を呈する。

ピット(図7・8)

P1：C-3杭の南側に位置する。大きさは東西径68cm、南北径42cm、深さ15cmの楕円形を呈し

た浅い掘り方である。掘り方の南西寄り底面に長さ 30cm、幅 20cm、厚さ 15cm ほどの鎌倉石が据えられている。かわらけ小片だけで図示可能な遺物は出土していない。

P 5・P 6 : C-3 杭の北隣した位置で検出され、P 6 より P 5 が新しい。平面形状は楕円形で長径 55cm、短径 35cm ほどの浅い掘り方である。覆土は炭化物・かわらけ小片を多く含む茶褐色砂質土、遺物は P 5 から基石の黒石 (52)、P 6 から手捏ね成形のかわらけ大皿 (53) が出土している。

P 7 : 建物 1 のロー 3 掘り方と土坑 3 よりも新しい遺構、平面形はほぼ円形の底面の小さな掘り方をもち、径 56cm、深さ 38cm ほどである。図 8-54 のロクロ成形のかわらけ小皿が出土した。

P 9 : D-2 グリットに位置し、建物 1 のロー 1 掘り方により一部を壊されている。掘り方は径 58cm 前後のほぼ円形を呈し、深さ 45cm を測る。図示可能な遺物はみられない。

第 1 面遺構外出土遺物 (図 8)

55~57 はロクロ成形のかわらけで 55・56 が小さめ口径で薄手器壁の小皿、57 の大皿が薄めの器壁は内彎気味に立ち上がる器形である。58・59 は竜泉窯系青磁で前者が小型の折腰皿、後者が無文の折縁皿である。

第 1 面下 土坑 12・13 (図 9・12)

土坑 12・13 とした遺構は、第 1 面構築土を除去しつつ第 2 面へ掘り下げて調査を進めていく段階で確認された土坑であるが、調査区西壁土層の堆積観察から第 2 面上層からの掘り込み土坑と考えられる。

土坑 12 : 調査区南西隅の位置で僅かに確認された土坑で土坑 13 を壊して掘り込まれている。確認できた規模は南北長 80cm 以上、東西長 50cm 以上、深さ 40cm で調査区外に広がっている。覆土は上層に鎌倉石片を含む茶褐色砂質土がみられ、底面上に厚さ 15cm 程の炭化物層が厚く堆積していた。

出土遺物は図 12-1~7 がロクロ成形のかわらけである。小皿は口径 7.7cm 前後で主に背低で開き気味の立ち上がり器形であるが 3 のやや背高で薄手器壁である。大皿は 6 の背低で器壁が開き気味の立ち上がり器形と、薄手器壁で丸深の器形もの。8 は常滑窯片口鉢 I 類の口縁部片である。9 はかわらけ質の袋物の土製品で小型の無頸壺と思われる。

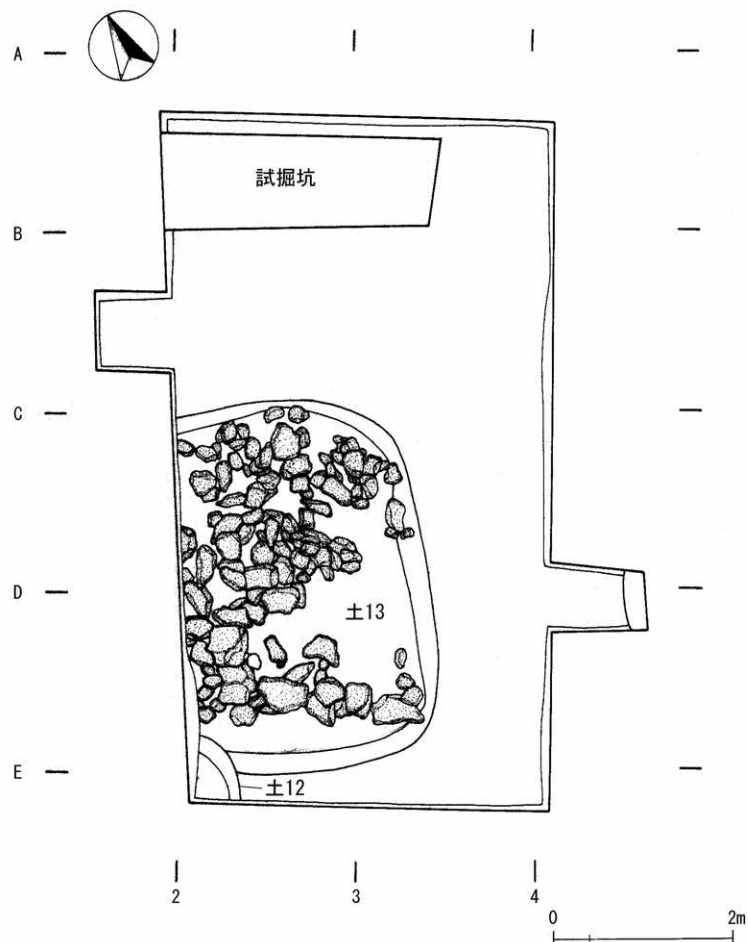


図 9 第 1 面下 土坑 12・13

土坑 13：第 1 面土坑 6 下からの位置で多量に投げ込まれた大小土丹塊・鎌倉石塊が散乱した状況で検出された。本址は南北長 415cm、東西長 270cm 以上で隅丸形状の浅い掘り込みである。遺構覆土は(図 3 調査区西壁土層の 8 層～12 層) 褐鉄分を含んだ茶褐色粘質土の上下層に挟まれて鎌倉石破碎の粗砂を多く混入した砂質土が堆積していた。遺物は図 12-10・11 のロクロ成形かわらけ大小皿、12・13 の常滑窯甕口縁片と片口鉢 I 類、14・15 の鉄釘などが少量出土した。

2. 第 2 面の遺構と遺物

第 2 面は灰褐～茶褐色粘質土の中世基盤層であり、海拔標高 19.05m 前後のほぼ平坦な地山面上まで掘り下げ発見した遺構は土坑 6 基、溝 1 条、ピット 14 口などである。遺物はロクロ成形のかわらけ、瀬戸・常滑窯製品、瓦、金属製品などが出土した。

土坑 (図 11・12)

土坑 14：D-3 杭に西隣した位置で。形状は不整形円形を呈し、長径 126cm、短径 118cm、深さ 30cm である。覆土は粗砂を多く含む灰褐色砂質土と締りのある灰褐色粘質土との上・下層からなり、上層に長さ 25～45cm ほどの鎌倉石塊が 5 個確認された。遺物はロクロ成形のかわらけ小破片だけであった。

土坑 15：B-3 杭に近接した位置である。楕円形の形状を呈し、大きさは長径 113cm、短径 70cm、深さ 20cm ほどで浅い皿状の掘り方、覆土はやや締りのある茶褐色粘質土である。図示可能な遺物は出土していない。

土坑 16：D-4 杭に位置し、東トレンチと調査区外へも拡がっている。本址は新旧関係みてピットの P10・11 よりも古く、溝 1 より新しい。形状は楕円形を呈し、大きさが長径 145cm、短径 98cm、深さ 20cm ほどの浅い掘り方で覆土は地山粘土ブロックを含んだ茶褐色粘質土である。遺物は図 12-16 のロクロ成形のかわらけ大皿である。

溝 (図 11・12)

溝 1：調査区南端でグリットラインに平行した主軸方位を示し調査区外の東西へ延びる素掘りの溝である。溝は調査区内で長さ 4 m

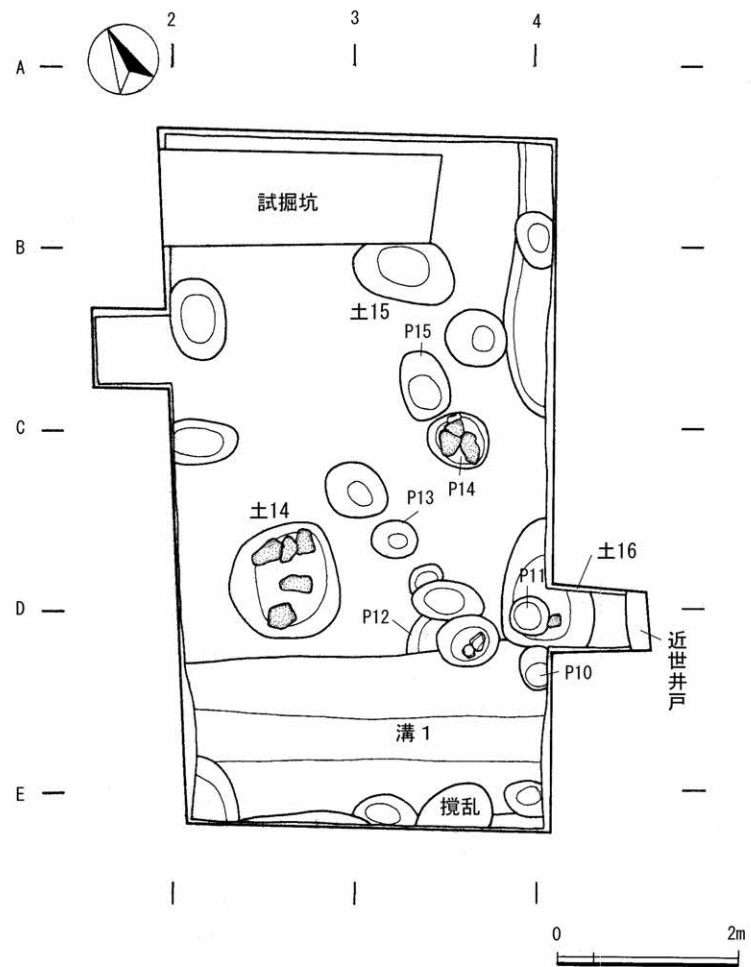


図 10 第 2 面全側図

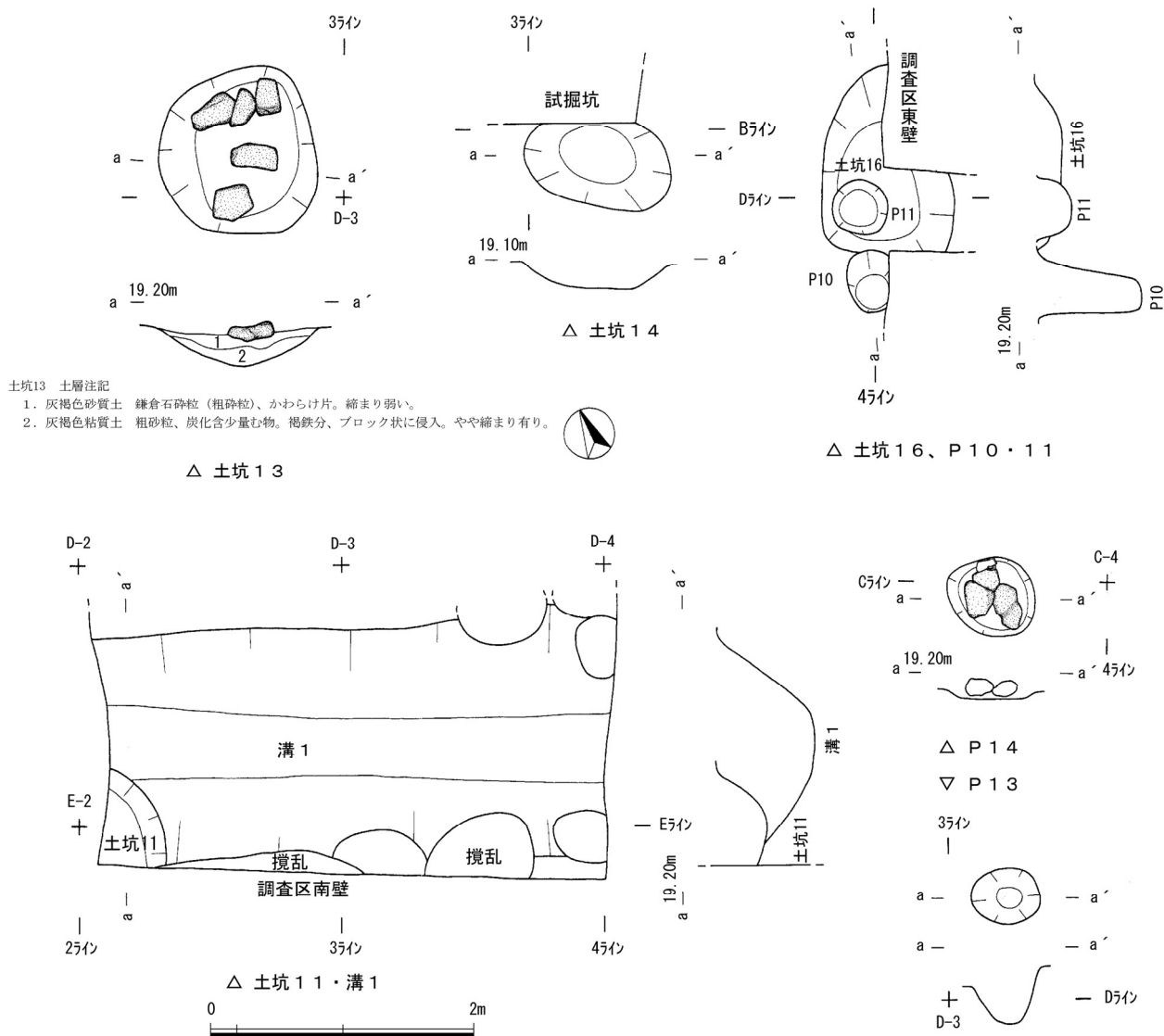


図 11 第 2 面遺構

以上、上端幅 190cm・下端幅約 50cm 前後で断面は整った「V字型」に近い逆台形を呈しており、確認面からの深さ 80cm 前後を測る。溝底面の海拔高は、東端が 18.45mほどであり、西端際が 18.20mを測り東から西へ向かって緩やかな傾斜を有しており、六浦道側から滑川への排水を目的にした溝であろうか。掘り込み面は中世基盤層上面であるが調査区西壁・東壁の土層断面から、当初の開削後に一度の改修または浚渫が行われていたことが観察されている。溝堆積の覆土をみると、図 3 に示した 16・17 層とした上層は地山ブロック・炭化物・遺物などを多めに混入したもので、溝廃棄時に埋め戻された土層と考えられる。その下には U 字型に堆積した厚さ 10cm 前後の鎌倉石を破碎したような粗砂の様子が認められ、この 18 層は溝の改修または浚渫後の堆積土層と考えられる。さらに 19 層の締りのある茶灰色粘質土は少しのかわらけ小片と、炭化物・有機物などを含んだ溝当初の堆積土と考えられる。

図12-17~43は溝埋め戻しの整地層にあたる覆土上層から一括して出土した。かわらけは全てロクロ成形の回転糸切底のものである。1は口径6.8cm、器高1.1cmの内折れタイプ、18~26の小皿は口径8cm以上、器高1.5cm前後の背低で、内彎した器形の18・22を除く資料はいずれも内底面が広く、薄手器壁が開きながら立ち上がる器形である。27~41の大皿には器高3cm前後が主体を占めているが、27・29・35・38・41の器高3.5cm前後の背高気味ものや39の器高2.6cmの背低なものが認められた。42は瀬戸窯四耳壺の口縁部片。43は北宋銭の皇宋口(通)宝(初鑄1039年)である。

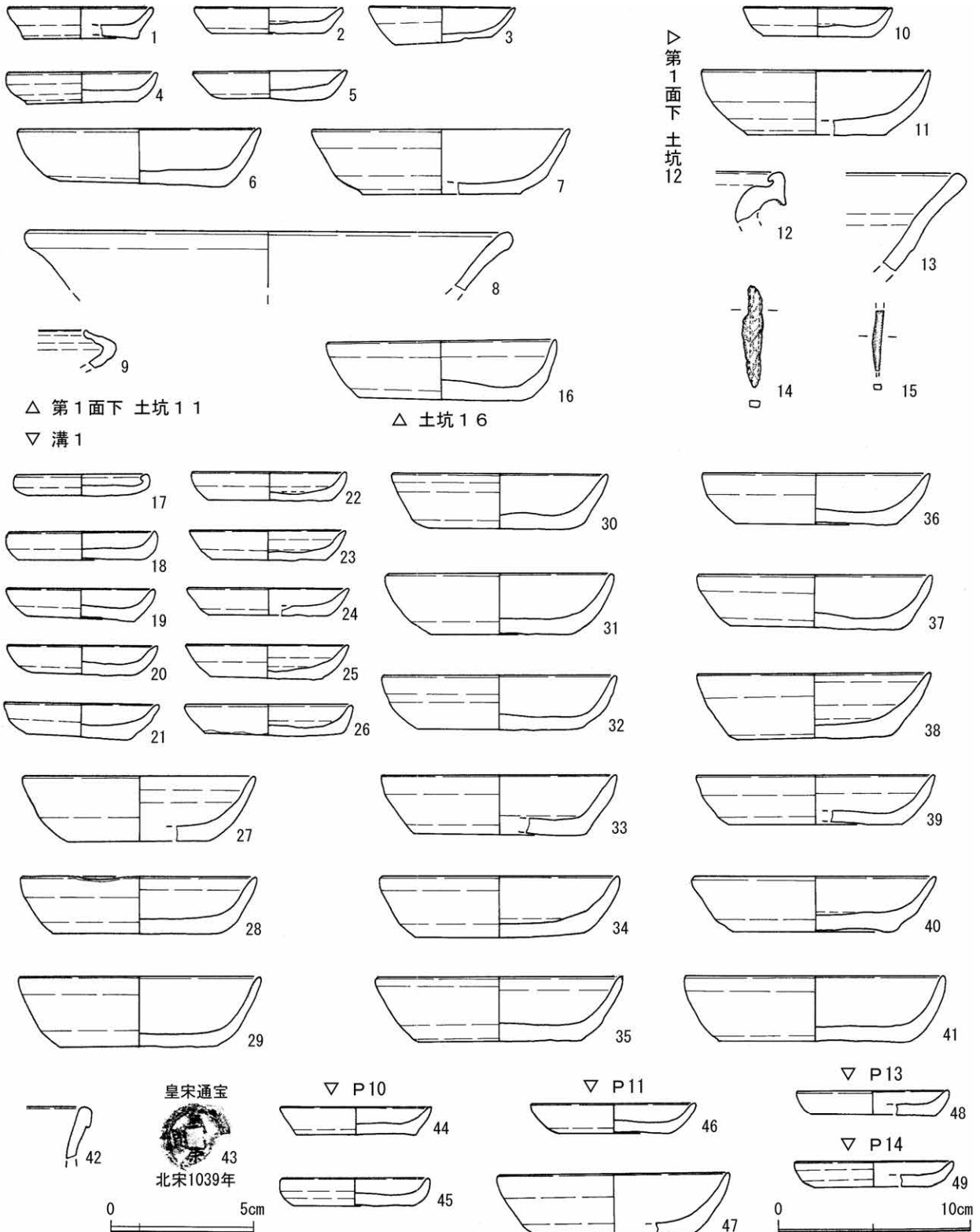


図12 第1面下・第2面出土遺物

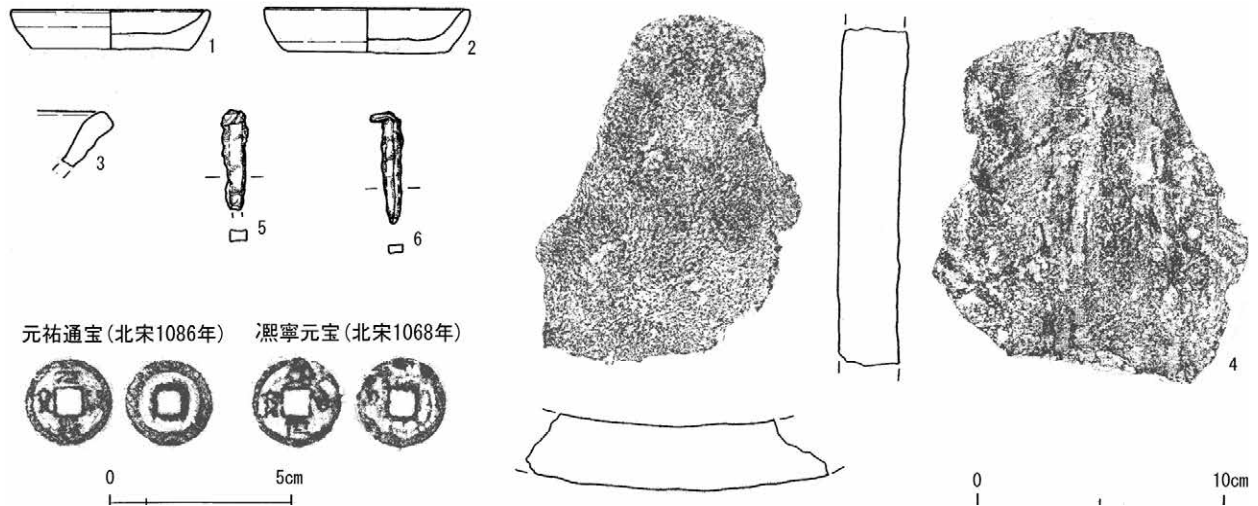


図13 第2面遺構外出土遺物

ピット (図11・12)

P10 : D-4 杭に位置し、溝1と土坑16を壊して掘り込んでいる。大きさは長径47cm、短径30cm以上、深さ70cmを測る。楕円形を呈した深い掘り方であるが底面に礎板等の痕跡は認められなかった。覆土は炭化物や褐鉄分を多めに含んだ茶灰色粘質土の単層である。遺物は図12-44・45のロクロ成形かわらけ小皿が2点であり、ともに薄手器壁の背低で内底面の広い器形であるが、器壁が直線的に開くものと内彎した立ち上がりをしている。

P11 : P10の北隣に位置し、土坑16よりも新しい遺構である。円形に近い形状で径45cm前後で深さ30cmを測り、覆土はやや締りがあり炭化物やかわらけ小片を含む灰褐色粘質土である。遺物は図12-46・47糸切底のかわらけ大小皿で背低気味の薄手器壁である。

P13 : C-3グリットで確認された。形状は楕円形を呈した長径46cm、短径35cm、深さ46cmを測り、締りのある茶灰色粘質土の覆土である。図12-48のかわらけ小皿が出土した。

P14 : C-3杭の東側に位置する。形状は楕円形を呈し、大きさが長径72cm、短径60cm、深さ10cmで浅い皿状である。中には頭大～拳大のやや扁平な鎌倉石塊が置かれている。図示可能な遺物は図12-49のロクロ成形かわらけ小皿だけである。

遺構外出土遺物 (図13)

1・2はロクロ成形のかわらけ小皿で背低気味の内底面が広く器壁が開く立ち上がりのもの。3は常滑窯片口鉢I類の口縁部小片で13世紀後半頃と思われる。4が永福寺II期瓦の女瓦D類と類似したものである。金属製品には5・6が鉄釘、7・8が北宋銭の「元祐通宝」(初鑄1086年)・「熙寧元宝」(初鑄1068年)である。

第4章 まとめ

今回の調査では、調査面積の狭小さや近代以降の削平を受けながらも、13世紀後葉から14世紀前葉を主体とした生活の様子を遺構・遺物を通して窺い知ることができた。本調査地点の北東側に所在する

明王院は、正式には飯盛山寛喜寺明王院五大堂する寺院、四代将軍九条頼経の開基、鶴岡八幡宮第六代別当の弁法印定豪(1152～1238 東寺系 源延俊の子)の開山、嘉禎元年(1235)に創建された鎌倉幕府の北東、鬼門の方向に位置する将軍御願寺であった。また建暦二年(1212)実朝開基の大慈寺は、明王院の東方一帯に旧蹟が所在したようで旧境内推定地からは大慈寺銘の軒先瓦が出土しており、瓦当製作技法や瓦当文様から推測して創建期瓦と推定され(註1)、また関東大震災の前には畑の中に「やしまの立石」という堂前苑池の立石があったという(註2)。

ところで調査で検出した第1面は、厚さ30cm程の現代客土を除去すると間層を挟まずに鎌倉石の破砕粒を敷き詰めた生活面(海拔標高約19.25m)が表出し、それに伴い13世紀末葉～14世紀前葉頃と推測される礎石建物・土坑・ピットなどが検出された。礎石建物跡は、東沿いを走る現在の六浦道にほぼ平行・直交するような主軸方位をもつことから、六浦道を軸方位に定められたような地割が存在していた可能性が考えられる。さらに第2面検出の東西方向の薬研堀形素掘り溝も直交した主軸を示していた。これまで公方屋敷跡(神奈川県遺跡台帳No.268)範囲における発掘調査で発見されている建物跡群や溝、道路などの遺構も六浦道とほぼ平行・直交した同一の軸方位で造られており、六浦道を軸にしたこれらの地割に準じている事が推測される。

次に出土遺物の傾向については、表8の遺物分類別出土数量・比率表に示したように第1・2面を併せ破片数にして総数953点であった。その内訳をみると、各面の遺構や遺物包含層・構築土遺構に伴う遺物は第1面の資料が567点(59.5%)、第2面の資料が386点(40.5%)であった。次に種類別遺物の出土比率についてみると、かわらけ853点(89.5%)と極めて高い出土比率で、次に瀬戸・常滑品の国産陶器48点(5%)、舶載陶磁器7点と極めて少なく1%にも満たないが、それに比べて銭9点(1%)は高い割合を示している。このほか、砥石・硯の石製品や骨・木炭が少量(約1%づつ)みられたが、地下水が低い関係から木製品の出土は溝1底面から木枝や削りかすが少量出土しただけである。2時期の生活面のうち、第1面に伴う遺物が全体の6割以上を占めており、さらに礎石建物跡や土坑などの発見から屋敷跡などの遺構密度の比較的高い生活の場を予想させるものであった。

東隣の浄明寺地区では足利公方屋敷跡などを中心に調査事例が増加しているが、十二所地区では今までのところ主に急傾斜地崩落対策の防災工事に伴う「やぐら」の発掘調査が中心であり、平面的な調査は殆ど実施されておらず、この地域の考古学的な調査での新資料を多少なりとも提供できたものと思われる、今後の周辺における調査事例の増加に期待したいところである。

註1 鎌倉国宝館で資料を筆者実見

註2 鎌倉文化研究会『鎌倉一史蹟めぐり会記録一』1972 有隣堂

【参考文献】

※第3章の文章中の引用文献も含んでいる。

川副武胤・雪 達人 1980 『鎌倉廃寺事典』 有隣堂

中野晴久 1994 「赤羽一郎・中野晴久『生産地における編年について』 シンポジウム資料『中世常滑焼をおって』
日本福祉大学知多半島総合研究所

藤澤良祐 1995 「京・鎌倉における古瀬戸の流通」『京・鎌倉出土の瀬戸焼』(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター

宗臺富貴子 1996 「鎌倉・今小路西遺跡(御成小学校)の瀬戸窯製品について」『(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第4輯

馬淵和雄 1997 「中世食文化の諸相―食器からみた中世鎌倉の都市空間」『国立歴史民族博物館研究報告』第71集

太宰府市教育委員会編 2000 「大宰府条坊跡XV―陶磁器分類編一」『大宰府市の文化財』第49集 大宰府市教育委員会

表2 遺物観察表 (1)

() は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径 (c m)	底径 (c m)	器高 (c m)	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
6-1	第1面 建物1 イ-1	かわらけ	(8.0)	(6.4)	1.7	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c. 明黄灰色 e. やや甘い
6-2	"	かわらけ	(12.3)	(7.4)	3.3	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 明黄灰色 e. やや甘い
6-3	"	瀬戸 四耳壺	肩部小片			a. 輪積技法 耳貼付け b. 黄灰色 砂粒 白色粒若干 良土 d. 灰白色 やや厚く施釉 e. 良好 硬質
6-4	第1面 建物1 イ-2	かわらけ	(7.6)	(5.2)	1.8	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c. 明黄灰色 e. やや甘い
6-5	"	かわらけ	7.8	5.4	1.7	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c. 明黄灰色 e. やや甘い
6-6	"	かわらけ	12.2	7.8	3.2	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 淡黄褐色 e. 良好
6-7	"	かわらけ	12.4	8.3	3.3	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや甘い
6-8	"	かわらけ	(12.9)	(8.0)	3.7	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄褐色 e. 良好
6-9	第1面 建物1 イ-3	鉄製品 釘	残存長3.5×幅0.4×厚0.25			a. 鍛造 断面四角
6-10	"	鉄製品 釘	残存長4.5×幅0.5×厚0.3			a. 鍛造 断面四角
6-11	第1面 建物1 イ-4	鉄製品 釘	残存長7.2×幅0.5×厚0.3			a. 鍛造 断面四角
6-12	"	かわらけ	(11.5)	(7.1)	2.9	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 少なめ粉質土 c. 淡黄褐色 e. 良好
6-13	"	かわらけ	(12.2)	(7.2)	3.5	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや砂質土 c. 黄褐色 e. 良好
6-14	"	かわらけ	(6.8)	(4.9)	1.7	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 黄褐色 e. 良好
6-15	"	かわらけ	(7.6)	(6.0)	1.5	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c. 黄褐色 e. 良好
6-16	"	かわらけ	(12.1)	(7.2)	3.2	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄褐色 e. 良好
6-17	"	かわらけ	(12.6)	(7.6)	3.2	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄褐色 e. 良好
6-18	第1面 建物1 ロ-1	かわらけ	(7.8)	(6.7)	1.4	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 黄褐色 e. 良好
6-19	"	かわらけ	(12.6)	(8.3)	3.1	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 やや粉質土 c. 黄灰色 e. やや甘い
6-20	"	かわらけ	(12.8)	(7.6)	3.4	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 粉質土 c. 黄褐色 e. 良好
6-21	"	かわらけ	(7.6)	(5.4)	1.8	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや良土 c. 黄褐色 e. 良好
6-22	"	かわらけ	(12.7)	(7.5)	3.5	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海面骨芯 粉質土 c. 淡褐色 e. 良好
6-23	"	白磁 口元皿	底径 (6.4)			a. ロクロ b. 淡灰白色 精良堅緻 d. 淡灰白色不透明 口唇部釉掻き取り露胎
6-24	第1面 建物1 ロ-2	かわらけ	(7.8)	(5.3)	1.6	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄褐色 e. 良好
6-25	第1面 建物1 ロ-3	かわらけ	7.2	4.4	1.9	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 粉質土 c. 橙色 e. 良好
6-26	"	かわらけ	7.8	6.5	1.6	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 小石粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
6-27	"	かわらけ	(7.8)	(5.2)	1.6	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c. 淡褐色 e. 良好
6-28	"	かわらけ	(11.8)	(8.0)	3.0	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 粗土 c. 橙色 e. 良好
6-29	第1面 建物1 ロ-4	かわらけ	(8.2)	(6.0)	1.5	a. ロクロ 外底系切痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 土丹粒 粗土 c. 黄褐色 e. 良好
6-30	第1面 建物1 ハ-3	かわらけ	(7.6)	5.0	1.5	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 淡黄褐色 e. 良好
6-31	"	常滑 片口鉢I類	口縁部小片			a. 輪積技法 b. 砂粒 白色粒 小石粒 やや多量 c. 灰色
8-1	第1面 土坑1	鉄製品 釘	残存長4.1×幅0.7×厚0.5			a. 鍛造 断面四角 f. 下端欠失 腐食が進み鉄心なし
8-2	第1面 土坑2	龍泉窯系 青磁蓮弁	体部下端片			a. ロクロ b. 灰白色 緻密 d. 暗灰緑色不透明 厚手施釉 貫入多し 二次焼成で白濁気味 e. 堅緻 f. 外面蓮弁文が白濁釉で不鮮明
8-3	第1面 土坑3	かわらけ	(7.7)	(5.1)	1.5	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 砂質土 c. 淡褐色 e. 良好
8-4	"	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.8	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 弱砂質土 c. 黄灰色 e. 不良
8-5	"	かわらけ	(8.0)	(5.2)	1.6	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 砂質土 c. 淡褐色 e. 良好
8-6	"	かわらけ	(12.8)	(8.4)	3.1	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 弱砂質土 c. 淡褐色 e. 良好
8-7	"	基石	1.3		0.3	a. 黒石 b. 黒色安山岩質 f. 表面滑らかで艶あり
8-8	"	銅銭	銭径2.4 銭厚0.1			祥符元宝 初鑄年 1008年 北宋
8-9	第1面 土坑3	銅銭	銭径2.4 銭厚0.1			高宗通宝 初鑄年 1039年 北宋

表3 遺物観察表 (2)

() は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径 (c m)	底径 (c m)	器高 (c m)	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
8-10	第1面 土坑3	銅銭	銭径2.3 銭厚0.1			嘉祐通宝 初鑄年 1056年 北宋
8-11	"	銅銭	銭径2.4 銭厚0.1			治平元宝 初鑄年 1064年 北宋
8-12	"	銅銭	銭径2.4 銭厚0.1			元豊通宝 初鑄年 1078年 北宋
8-13	第1面 土坑4	かわらけ	(7.9)	(6.5)	1.2	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 弱砂質土 c. 淡橙色 e. 良好
8-14	"	かわらけ	(8.1)	(7.1)	1.2	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 弱砂質土 c. 橙色 e. 極めて良好
8-15	"	かわらけ	(8.3)	(7.0)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 砂質土 c. 淡橙色 e. 良好
8-16	"	かわらけ	(12.8)	(9.5)	3.1	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 弱砂質土 c. 橙色 e. 良好
8-17	"	龍泉窯系青磁 鎗蓮弁文碗	口縁部片			a. ロクロ b. 淡灰色 黒色微粒子 d. 灰緑色半透明 やや厚手施釉 f. 外面鎗蓮弁文片切彫り
8-18	"	常滑 片口鉢I類	口縁部片			a. 輪積技法 b. 長石・石英粒を多く含む粗土 明灰色 f. 口唇部～内面に自然降灰の灰釉
8-19	第1面 土坑5	かわらけ	(6.8)	(4.4)	(1.6)	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 砂質土 c. 橙色 e. 良好
8-20	"	かわらけ	(7.7)	(5.1)	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 弱砂質土 c. 淡橙色 e. 良好
8-21	第1面 土坑6	かわらけ	(8.1)	(5.4)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 砂質土 c. 淡橙色 e. 良好
8-22	"	かわらけ	8.0	6.2	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 砂質土 c. 淡橙色 e. 良好
8-23	"	かわらけ	8.2	6.0	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 砂質土 c. 淡橙色 e. 良好
8-24	"	かわらけ	(12.6)	(9.6)	2.8	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 弱砂質土 c. 橙色 e. 良好
8-25	"	かわらけ	(13.0)	(8.0)	2.9	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 弱砂質土 c. 淡橙色 e. やや不良
8-26	"	白磁 口元皿	9.8			a. ロクロ 口縁部が外反気味 b. 灰白色 微砂 d. 灰白色の半透明、口縁部釉薬剥ぎ取り
8-27	"	瀬戸 入子	(4.0)	1.7	0.8	a. ロクロ 外底ヘラ削り痕 b. きめ細かい精良土 c. 淡灰色 e. 堅緻 f. 内面体部に自然降灰
8-28	"	砥石	残存長4.4×残幅3.1×厚1.0			a. 上下面が砥面使用 c. 緑味灰白色 f. 京都鳴滝産の仕上砥
8-29	第1面 土坑8	かわらけ	(12.5)	(9.3)	2.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 弱砂質土 c. 黄灰色 e. やや不良
8-30	"	かわらけ	(12.9)	(9.2)	3.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 砂質土 c. 淡灰色 e. やや不安
8-31	"	南伊勢系 土鍋	口縁部片			a. 輪積 薄手器壁 口縁部外反、口端を内方へ折り返す b. 砂粒 雲母が多め砂質土 c. 肌色気味 e. 硬質
8-32	"	南伊勢系 土鍋	胴部片			8-31と同一個体、f. 外面ヘラ削り 木口状工具擦痕 内面横位ナデ
8-33	"	男瓦 (丸瓦)	(15.8)		2.2	a. 凸面: 縄目引き後に縦位ナデ消し 凹面: 細かな布目痕 b. 砂粒含むがやや粉質良土 c. 灰色 e. 良好 f. 永福寺II期瓦と同類(埼玉水殿瓦窯産)
8-34	"	かわらけ	7.6	5.5	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 砂質土 c. 橙色 e. 良好 f. 煤が内壁付着
8-35	"	かわらけ	7.9	6.0	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 多く含む粗土 c. 橙色 e. 良好
8-36	"	かわらけ	(8.0)	(6.2)	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 やや砂質土 c. 黄灰色 e. 不良
8-37	"	かわらけ	(8.2)	(6.2)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 弱砂質土 c. 黄灰色 e. やや不良
8-38	"	かわらけ	(8.5)	6.5	1.3	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. 不良
8-39	"	かわらけ	(8.2)	6.8	1.3	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 口径と底径の比率が少なく背低い b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや良土 c. 黄灰色 e. やや不良
8-40	"	かわらけ	8.5	6.4	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 小石粒 多めに含むやや粗土 c. 黄灰色 e. 不良
8-41	"	かわらけ	8.7	6.5	2.1	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 外反気味 b. 微砂 雲母 赤色粒 やや粉質土 c. 橙色 e. 良好
8-42	"	かわらけ	(12.6)	(8.4)	3.1	a. ロクロ 外底糸切痕(粗) 板状圧痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 多く含む砂質粗土 c. 橙色 e. 良好
8-43	"	かわらけ	(13.3)	(9.8)	3.0	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. 不良
8-44	"	かわらけ	(13.0)	(9.3)	3.3	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 c. 淡橙色 e. やや不良
8-45	"	かわらけ	(13.1)	(10.1)	3.3	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 多めに含む砂質粗土 c. 橙色 e. 良好
8-46	第1面 土坑10	かわらけ	(8.0)	(5.7)	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 土丹粒 c. 淡橙色 e. やや不良
8-47	"	白磁 口元皿	10.2	6.0	2.5	a. 口縁部は端反状を呈す b. きめ細かく堅緻 淡灰色 d. 灰白色半透明 外底粗く拭き取り釉むらが著しい 口唇部釉掻き取り露胎
8-48	"	かわらけ	7.5	5.9	1.4	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c. 明黄灰色 e. やや甘い
8-49	第1面 土坑11	かわらけ	8.4	5.6	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 黒色粒 やや良好 c. 明黄褐色 e. やや甘い

表4 遺物観察表 (3)

() は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径 (c m)	底径 (c m)	器高 (c m)	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
8-50	第1面 土坑11	かわらけ	12.8	9.0	3.1	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 淡黄灰色 e. やや甘い
8-51	"	かわらけ	12.4	7.2	3.1	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 淡橙色 e. 良好
8-52	第1面 P 5	基石	1.6		0.3	石材: 黒色安山岩質 f. 円形肉薄で表面滑らか
8-53	第1面 P 6	かわらけ	(13.3)	稜部径 (12.5)	3.3	a. 手捏ね 外底指頭圧痕 b. 微砂 赤色粒 海綿骨芯 弱砂質土 c. 橙色 e. 良好
8-54	第1面 P 7	かわらけ	(7.9)	(5.5)	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕粘土はみ出し b. 微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 砂質土 c. 淡橙色 e. 良好
8-55	第1面 遺構外	かわらけ	7.7	5.7	2.0	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 弱砂質土 c. 橙色 e. 良好
8-56	"	かわらけ	7.4	4.4	2.0	a. ロクロ 外底糸切痕粘土はみ出し b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 少なめに含む弱粉質土 c. 淡橙色 e. 良好 f. 口唇部内外に煤付着 灯明皿
8-57	"	かわらけ	(12.9)	(8.3)	3.3	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 薄手器壁 b. 微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 c. 淡橙色 e. 良好
8-58	"	龍泉窯系 青磁折腰皿	底部径 (4.0)			a. 断面三角形の削出高台 腰が張る形状 b. 黒色微粒子含む 灰白色 精良堅致 d. 灰緑色不透明 高台量付露胎 f. 無文
8-59	"	龍泉窯系 青磁折縁皿	口縁部片			a. 口縁外反の折縁 b. 黒色微粒子を含む灰白色 d. 濃緑色不透明 厚手施釉 貫入多い f. 外面に蓮弁文片切彫り
12-1	第1面下 土坑12	かわらけ	(7.6)	(6.0)	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 黄橙色 e. 良好
12-2	"	かわらけ	(7.7)	(5.9)	1.4	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 淡黄橙色 e. 良好
12-3	"	かわらけ	(7.6)	(5.1)	1.9	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 良土 c. 淡橙色 e. 良好
12-4	"	かわらけ	(7.8)	(5.9)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c. 淡黄橙色 e. 良好
12-5	"	かわらけ	(7.9)	(5.3)	1.4	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 粗土 c. 淡黄橙色 e. 良好
12-6	"	かわらけ	12.6	8.9	2.9	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 土丹粒 やや砂質粗土 c. 黄橙色 e. 良好
12-7	"	かわらけ	(13.5)	(8.4)	3.4	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや甘い
12-8	"	常滑 片口鉢 I 類	口縁部片 口径: (25.2)			b. 灰色 砂粒 海綿骨芯 白色粒 小石粒 やや多め c. 灰色
12-9	"	土製品 壺類	小片のため復元不可			b. 黄灰色 微砂多し 雲母 海面骨芯 c. 明黄灰色 f. 砂粒が多く焼き締りに欠けぼそぼそした感じ
12-10	第2面 土坑13	かわらけ	(7.7)	(5.8)	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 (不明瞭) b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや砂質土 c. 淡黄橙色 e. 良好
12-11	"	かわらけ	(11.9)	(7.3)	3.4	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 淡橙色 e. 良好
12-12	"	常滑 甕	小片のため復元不可 縁 帯幅 1.8			a. 輪積技法 b. 灰色 砂粒 白色粒 黒色粒 少量 c. 暗茶褐色 d. 自然降灰 f. 中野編年 6a 型式相当か
12-13	"	常滑 片口鉢 I 類	口縁部～体部 小片のため復元不可			a. 輪積技法 b. 灰色 砂粒 白色粒 小石粒 やや多い粗土 c. 灰色 f. 内面に使用磨滅
12-14	"	鉄製品 釘	5.3	0.5	0.3	a. 鍛造 断面四角形
12-15	"	鉄製品 釘	3.1	0.4	0.3	a. 鍛造 断面四角形
12-16	第2面 土坑16	かわらけ	12.0	8.6	3.1	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
12-17	第2面 溝 1	内折れ かわらけ	(6.8)	(5.6)	1.1	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 土丹粒 粗土 c. 黄灰色 e. やや甘い f. 再火受け 口縁部～器表に焼け焦
12-18	"	かわらけ	(7.6)	(6.6)	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 土丹粒 粗土 c. 黄灰色 e. 不良
12-19	"	かわらけ	7.8	5.7	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや甘い
12-20	"	かわらけ	7.9	5.7	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 粗土 c. 黄橙色 e. 良好
12-21	"	かわらけ	8.0	5.5	1.8	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 土丹粒 やや砂質土 c. 黄灰色 e. やや甘い
12-22	"	かわらけ	8.0	6.5	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 良土 c. 黄灰色 e. やや甘い
12-23	"	かわらけ	8.1	6.1	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
12-24	"	かわらけ	(8.4)	(6.2)	1.4	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや甘い
12-25	"	かわらけ	8.5	6.0	1.8	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 粗土 c. 黄橙色 e. 良好
12-26	"	かわらけ	8.6	7.3	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
12-27	"	かわらけ	(12.0)	(7.3)	3.4	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 小石粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
12-28	"	かわらけ	12.4	9.1	3.0	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 土丹粒 粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 左右歪みあり

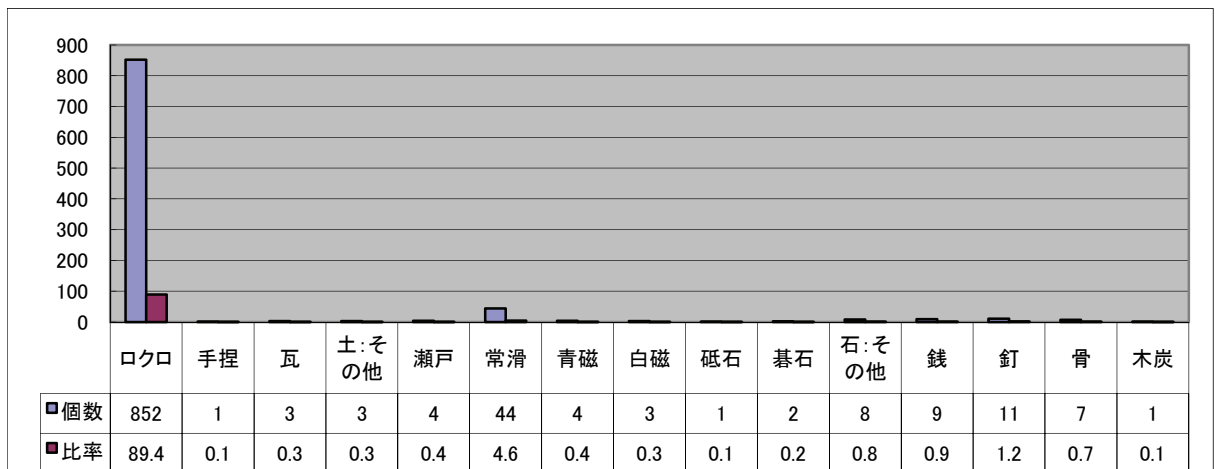
表5 遺物観察表 (4)

() は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径 (c m)	底径 (c m)	器高 (c m)	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
12-29	第2面 溝1	かわらけ	(12.5)	(8.2)	3.6	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや甘い
12-30	"	かわらけ	(11.4)	(7.4)	3.0	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
12-31	"	かわらけ	12.0	7.4	3.2	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 橙色 e. 良好
12-32	"	かわらけ	(12.2)	(8.4)	2.9	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
12-33	"	かわらけ	(12.2)	(8.9)	3.2	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 土丹粒 砂質粗土 c. 黄灰色 e. やや甘い
12-34	"	かわらけ	12.4	9.0	3.2	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
12-35	"	かわらけ	12.8	8.6	3.3	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや甘い
12-36	"	かわらけ	(11.8)	(7.4)	3.2	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
12-37	"	かわらけ	12.2	8.8	2.8	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 粗土 c. 黄灰色 e. やや甘い
12-38	"	かわらけ	12.2	8.0	3.3	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 粗土 c. 橙色 e. 良好
12-39	"	かわらけ	(12.4)	(9.0)	2.6	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや砂質土 c. 橙色 e. 良好
12-40	"	かわらけ	12.6	8.6	2.9	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや甘い
12-41	"	かわらけ	(13.4)	(10.0)	3.4	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 橙色 e. 良好
12-42	"	瀬戸 四耳壺	口縁部小片			a. 輪積技法 b. 黄白色 砂粒 d. 灰粉 黄白色やや厚く施釉 e. 良好
12-43	"	銅銭	銭径2.4 銭厚0.1			高宋通宝 初鑄年 1039年 北宋
12-44	第2面 P10	かわらけ	(7.9)	(6.3)	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや甘い
12-45	"	かわらけ	7.8	6.3	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
12-46	第2面 P11	かわらけ	(8.6)	(6.0)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. やや甘い
12-47	"	かわらけ	(12.2)	(8.3)	3.2	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 砂質土 c. 暗橙色 e. 良好
12-48	第2面 P13	かわらけ	(7.9)	(6.6)	1.3	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや甘い
12-49	第2面 P14	かわらけ	(8.3)	(6.0)	1.4	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 小石粒 やや砂質土 c. 淡黄橙色 e. 良好
13-1	第2面 遺構外	かわらけ	(8.2)	(6.5)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
13-2	"	かわらけ	(8.4)	(6.5)	1.8	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
13-3	"	常滑 片口鉢I類	口縁部小片			a. 輪積技法 口唇部丸味もち肥厚 b. 灰褐色 砂粒 長石粒 石英粒 多量粗土 c. 灰褐色 e. 良好
13-4	"	女瓦(平瓦)	厚さ 2.4~2.7			a. 凹面：離れ砂多量付着 凸面：斜格子叩き目 離れ砂 縦位指ナデ c. 灰白色 黒色微砂 石粒多い粗土 e. やや不良 f. 永福寺II期瓦(女瓦D)
13-5	"	鉄製品 釘	残存長4.1×幅0.7×厚0.4			鍛造 断面四角形
13-6	"	鉄製品 釘	残存長4.6×幅0.6×厚0.4			鍛造 断面四角形
13-7	"	銅銭	銭径 2.4 銭厚 0.1			元祐通宝 初鑄年 1086年 北宋
13-8	"	銅銭	銭径 2.4 銭厚 0.1			灑寧元宝 初鑄年 1068年 北宋

表6 遺物分類別出土数量・比率表

出土地種類		1面	1面建物	2面	個数	比率(%)
かわらけ	ロク口	222	285	345	852	89.4
	手捏	1	0	0	1	0.1
瓦質製品	瓦	1	0	2	3	0.3
土製品	その他	2	0	1	3	0.3
国産陶器	瀬戸	3	1	0	4	0.4
	常滑	15	5	24	44	4.6
舶載陶磁器	青磁	4	0	0	4	0.4
	白磁	2	1	0	3	0.3
石製品	砥石	1	0	0	1	0.1
	碁石	2	0	0	2	0.2
	その他	3	3	2	8	0.8
金属品	銭	5	1	3	9	0.9
	釘	3	4	4	11	1.2
自然遺物	骨	2	0	5	7	0.7
	木炭	1	0	0	1	0.1
合計		267	300	386	953	100
比率(%)		28.5	31.5	40.5		



白ペイントが1の掘り方



▲ a. 第1面全景(北から)

▼ b. 建物1(西から)



▲ c. 建物1 口-3(西から)

手前から拡張トレンチ内で確認した
ハ-3掘り方、礎石が残るロ-3
掘り方とイ-3掘り方



▲ d. 建物1 口-2(北から)



▲a. 建物1 イ-4(東から)



▲b. 建物1 ハ-3(西から)



▲c. 土坑6(西から)



▲d. 土坑10 白磁皿出土状況

▶ e. 第1面下 土坑13(西から)





▲ a. 第2面全景(北から)



▲ b. 第2面全景(南から)



▶ c. P10・溝1東端(南から)



▶ d. 土坑13、P12・13(面から)

▲ d. 建物開口-2(北から)

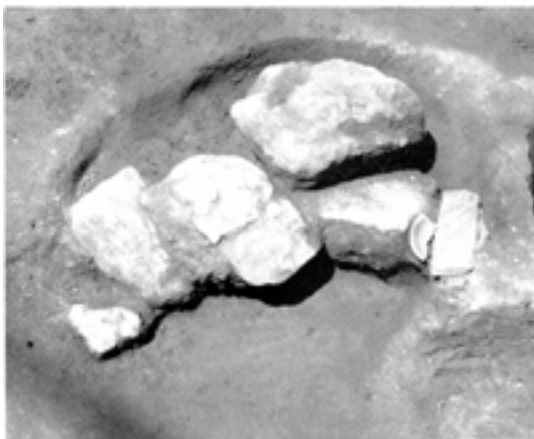


◀ a. 溝1(西から)

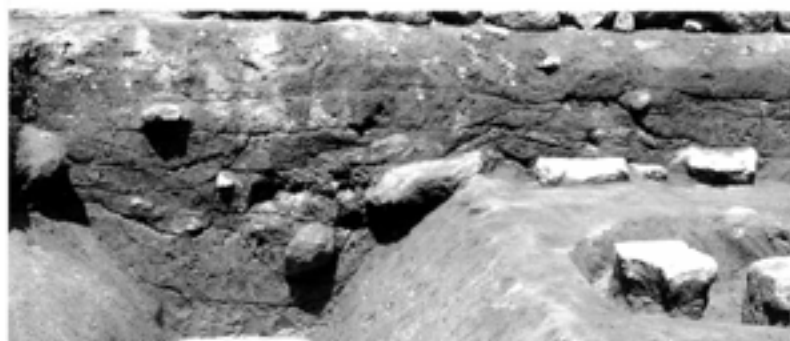


▲ b. 溝1(東から)

▼ c. P14(東から)



▼ d. 調査区西壁土層

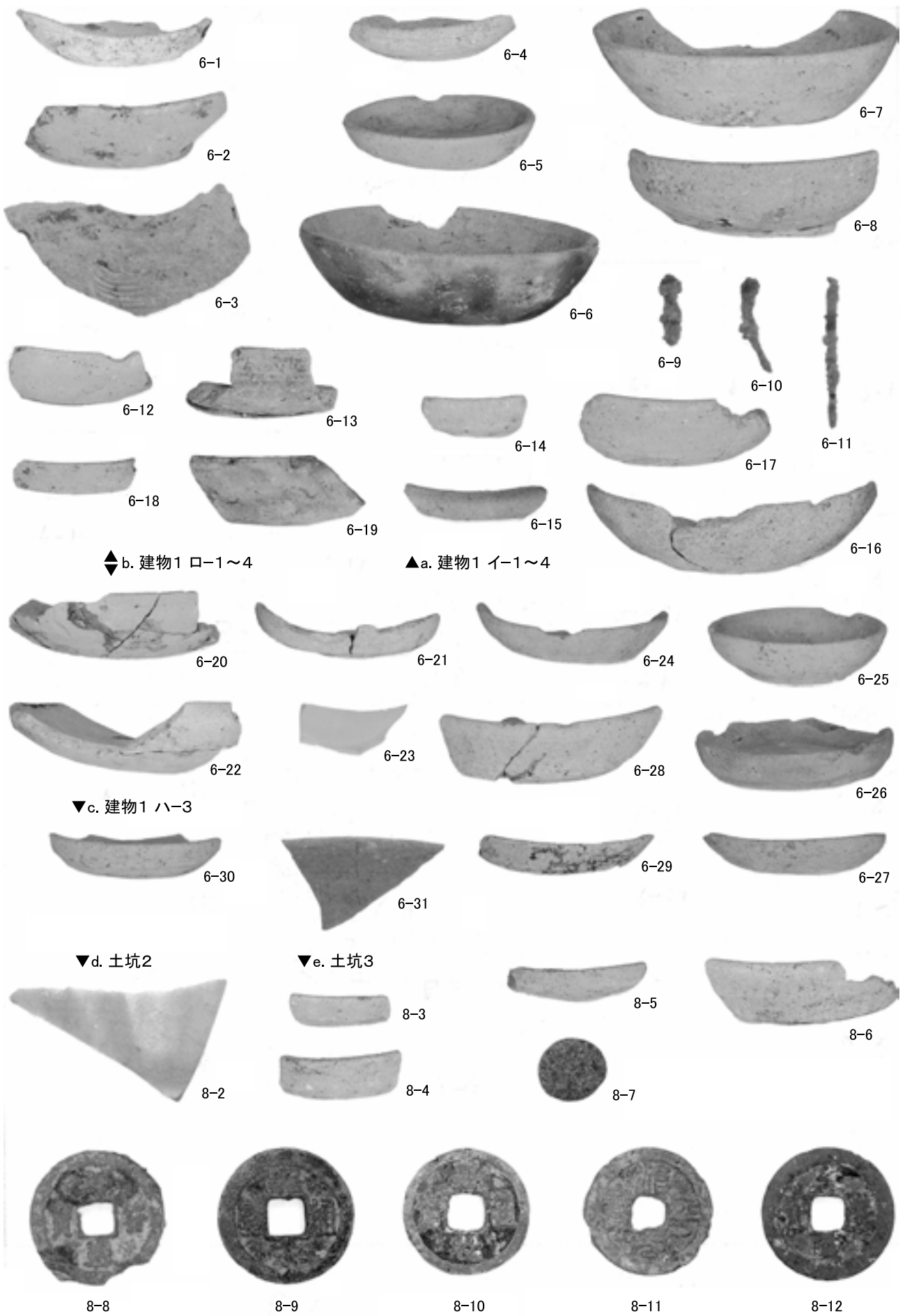


◀ e. 調査区西壁南側土層

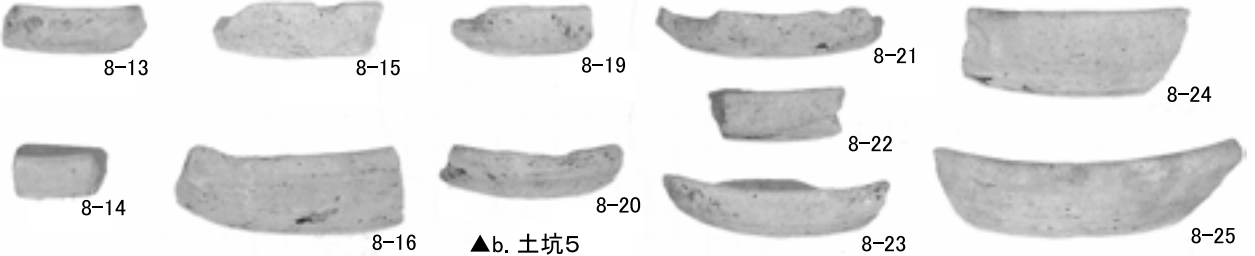
▼ f. 調査区画壁北側土層



図版5



▶ a. 土坑4

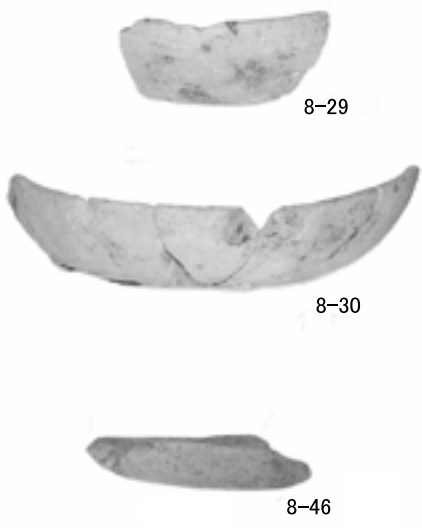


▲ b. 土坑5

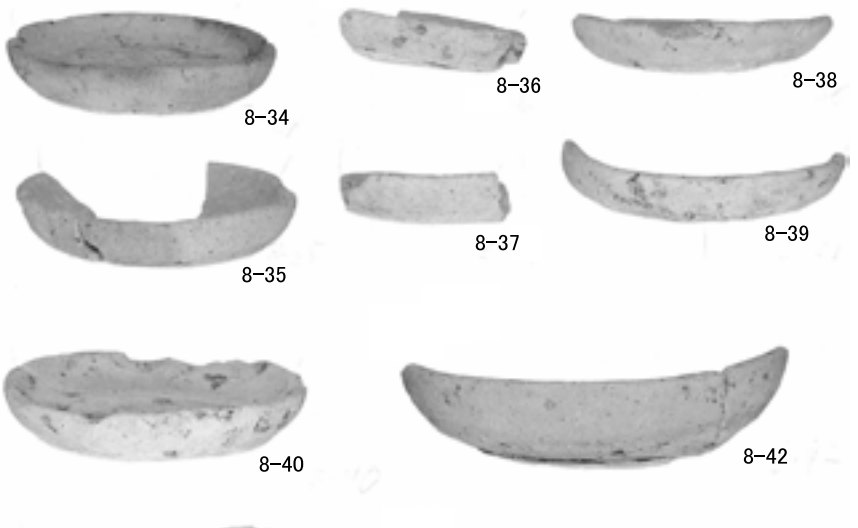


▲ c. 土坑6

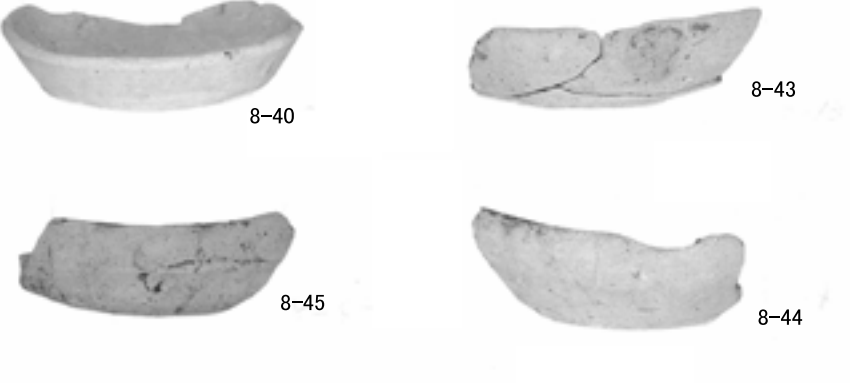
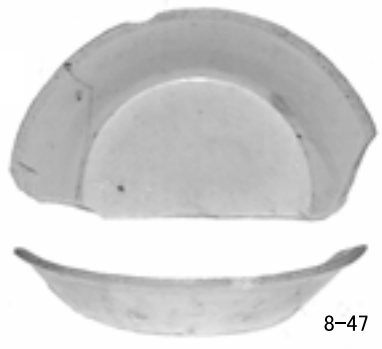
▼ d. 土坑8



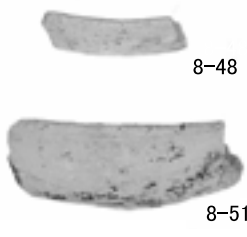
▼ e. 土坑9



▼ f. 土坑10



▼ g. 土坑11



▼ h. P-5



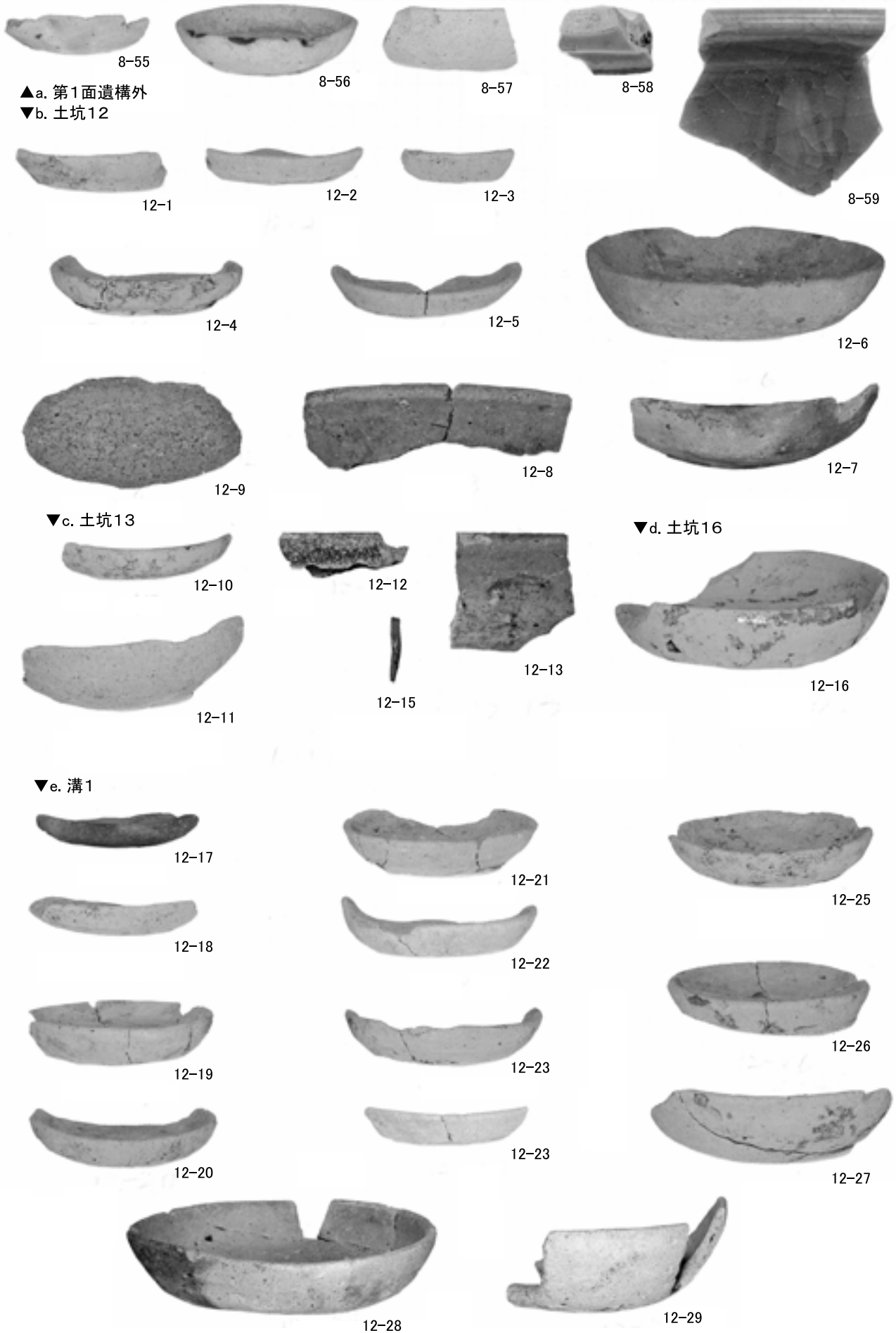
▼ i. P-6



▼ j. P-7



图版7





12-30



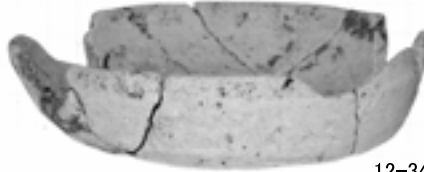
12-31



12-32



12-33



12-34



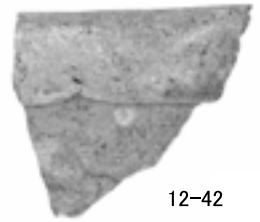
12-41



12-35



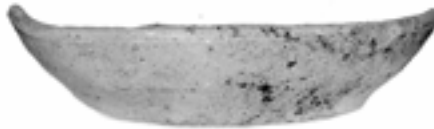
12-38



12-42



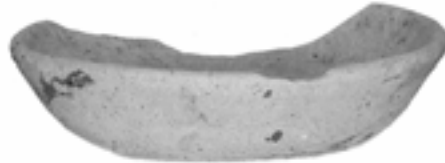
12-37



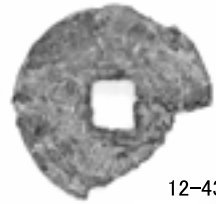
12-38



12-39



12-40



12-43

▲a. 溝1

▼b. P10



12-44



12-45

▼c. P11



12-46

▼d. P13



12-48

▼d. P14



12-49

▶ f. 第二面遺構外



13-3



13-5



13-6



13-4



13-7



13-8

